

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

芦原

豊橋校区史

32

Ashihara



梅田川





校区のあゆみ 芦原

次世代を担う芦原っ子たち



(写真撮影 平成17年3月)

恵みをもたらす梅田川



農作業は機械化が進む



田植えの水田には満々と湛えた水



鎮守の森
(高師神社)



上空から芦原校区を眺める



無事故を桜が見守る



野依橋付近 (平成18年撮影)



魚捕りを楽しむ (昭和51年頃野依橋)

市民の憩いの広場 (高師緑地公園)



うまく登れるかな？



ゴールを目指して (芦原小持久走大会)



高師緑地公園



うまく滑れた



ほくもわたしも水遊び

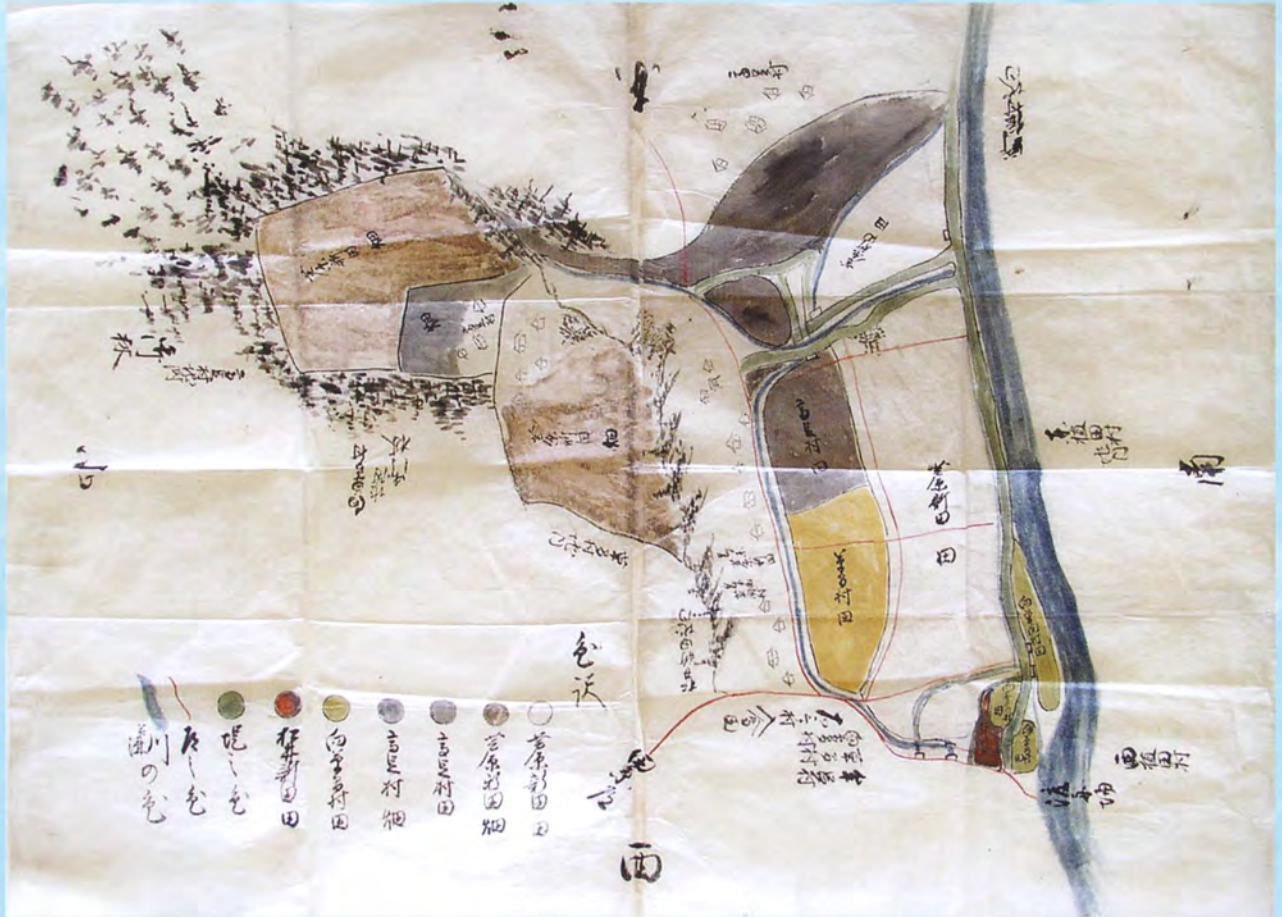


楽しいランチタイム (あしはら保育園児)



五月晴れの下での市民の楽しい集い

校区内の歴史・文化財を訪ねる



芦原新田の絵図（元禄時代）



道祖神
(七曲がり坂)



道しるべ
(国道259号 アイプラザ豊橋手前の三叉路)

発刊によせて



平成 18 年度
豊橋市総代会長
西 義 雄

このたび、豊橋市制施行 100 周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100 年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51 校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた 100 周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この 100 周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の 100 年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成 18 年度
芦原校区総代会長
棚 橋 建 太 郎

校区在住の皆様のお手元に校区史をお届けすることができますことは、今回編集に携わった関係者の一人として嬉しい限りです。

今、校区史を手にとりてみます皆様一人ひとりに、読み進める過程で自分達の校区のあゆみや自然等に関する新たな発見の数多いことを願って、下記の事に留意して編集に努めました。

まず、第 1 章の自然と環境では、めぐまれた自然を重点に、第 2 章の歴史と生活では、江戸時代に生きた人々が、豊かな暮らしを願って努力した芦原新田開発と、梅田川の船着場として「高足湊」が海上輸送に力を注いだことです。また、校区在住の方々に戦時中・戦後の生活体験を語ってもらい、当時の様子が如実に伝わるように囲み記事での紙面構成を考えました。

第 3 章の教育と文化では、芦原小学校のあゆみで母校が、明治 6 年高林寺に「第 10 中学区第 10 番小学脩徳学校」としてスタートしたことと、校区内の神社寺院、遺跡等に関する資料や写真を掲載しました。

この校区史を手掛かりに今まで以上に、自分達が住んでいる故郷に愛着と誇りを持つ上での一助となれば幸いです。

最後に、校区史の発行に当たりご指導・ご協力いただきました関係者各位に心よりお礼申し上げます。

発刊によせて

目次

第1章 自然と環境

- 1 位置と地形 7
 - (1) 土地のようす 7
 - (2) 校区のなりたち 8
 - (3) 町の発展 10
- 2 めぐまれた自然 12
 - (1) 豊かな緑 12
 - (2) 芦原の野原 14
- 3 災 害 15
 - (1) 地 震 15
 - (2) 台 風 15
 - (3) 竜 巻 15
 - (4) 急傾斜地危険地域指定 15

第2章 歴史と生活

- 1 芦原校区のあゆみ 16
 - (1) 大むかしの芦原 16
 - (2) 芦原村のはじまり 18
 - (3) 高足湊 19
 - (4) 農民のくらし 21
 - (5) 戦時下の高師原 23
 - (6) 戦後のあゆみ 28
 - (7) 市街化 30
- 2 交通の発達 31
 - (1) 古道と常夜燈 31
 - (2) 街 道 31
 - (3) 豊橋鉄道 渥美線 31
 - (4) バス路線 32
- 3 産業のあゆみ 33
 - (1) 農 業 33
 - (2) 工 業 34
 - (3) 商 業 35
- 4 総代会と校区の活動 36
 - (1) 校区創立に向けて 36
 - (2) 総代会と各種団体 37
 - (3) 主な活動 37

- 5 これからの芦原校区 38
 - －願いと希望、そして夢－ 38
 - 芦原っ子の夢（未来の芦原小学校） 39

第3章 教育と文化

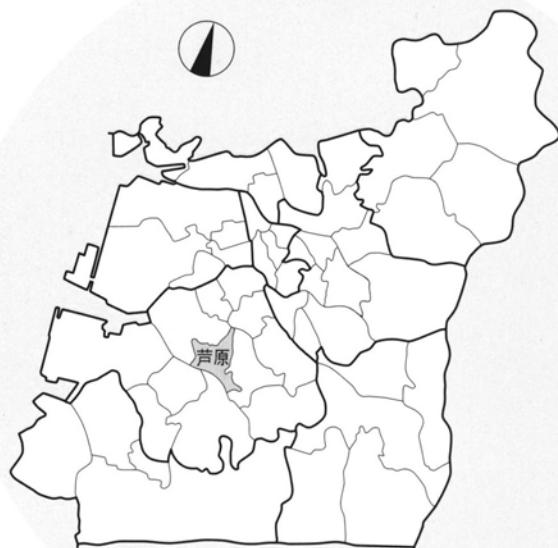
- 1 学校教育と保育 40
 - (1) 歩みだした「近代学校」 40
 - (2) 芦原小学校ができるまで 40
 - (3) 芦原小学校 41
 - (4) 本郷中学校 43
 - (5) あしはら保育園 43
- 2 戦後の社会教育 44
 - (1) コミュニティ活動 44
 - (2) 校区社会教育委員会 44
 - (3) 芦原校区市民館の活動 45
 - (4) 本郷地区市民館の活動 45
 - (5) 高師緑地公園の施設 46
- 3 ふるさと再発見 47
 - (1) 神 社 47
 - (2) 寺 院 48
 - (3) 遺 跡 49
 - (4) 芦原の先覚者 50
 - (5) 芦原に伝わる民話・むかし話 51

参考文献 52

編集後記 52

表紙 芦原小卒業制作版画(昭和59年度)

校区の位置



第1章 自然と環境

1 位置と地形

芦原校区は豊橋市の南部に位置し、東は高師校区、西は磯辺校区、南は植田・野依校区、北は栄校区と接している。そして、校区内北部には広大な高師緑地公園があり、南部には東西に梅田川が流れている。

公共施設の一つである芦原小学校は、東経137度23分03秒、北緯約34度42分51秒に位置している。



梅田川

(1) 土地のようす

今から約160万年前から1万年前の時代(氷河期)に、川が運んだ土砂や石が積もり、そこが盛り上がりできた台地(洪積台地)が高師原・天伯原になって広がっている。

高師原の台地は、豊川が運んだ土砂や石できていて、高さは20~30mである。天伯原に比べてあまり雨に削られていない若い台地なので平らな面が多く残っている。

芦原校区では、標高約20m前後の台地に多くの住宅が建っている。一番高い所は、西高師町白山地点で約25m、次は芦原町七曲り坂上約23.5mである。反対に低い所は西高師町

船渡約2mである。

高師原と天伯原を分けている梅田川は、静岡県境から流れ出した水が、三河湾に向って東から西に流れている。

気候は温暖であるが、冬には西風が吹き乾燥しやすい。平均気温16.3℃、平均雨量1,400mmである。

地形の特徴 高師原台地は、礫層、砂層、粘土層の互層からなっており、砂層シルト層が厚く、10mに及ぶものもある。このため地下水は深めで台地上には水が乏しく植物の生育に適さなかった。

高師小僧 高師原一带に産する管状、樹枝状の褐鉄鉱の固まりで、その形が幼児・鳥・魚などを想像させるためこの名がつけられたという。湖沼や湿地に棲む鉄バクテリアが水中に溶けている鉄分を酸化して、褐鉄鉱に変化させ、木や根の表面に積み重ねていくためにできるとされている。

昭和32年、高師台中学校校庭の一角が自生地として愛知県天然記念物に指定された。大きさは、鉛筆の芯ぐらいのものから直径30cmぐらいのものまでである。



芦原小学校の玄関に展示

湧水 段丘下の低地には、清水が湧き出ており清水、或いは田井戸と呼び生活に利用していた。やがて集落ができ、近くにお宮やお寺を祀り始めた。

最近清水は少なくなったが、それらの多くは水脈となって地下に今も流れ続けている。



小谷清水池

(2) 校区のなりたち

芦原校区は「西高師町」「高師町」「芦原町」「松井町」「新芦原町」の五町内会で構成されている。但し、新芦原町内会は昭和37年(1962)に西高師町西浦、同奥谷、同沢向、芦原町西上の山林を開発した住宅団地住民の自治会として発足した。

芦原校区の人口推移

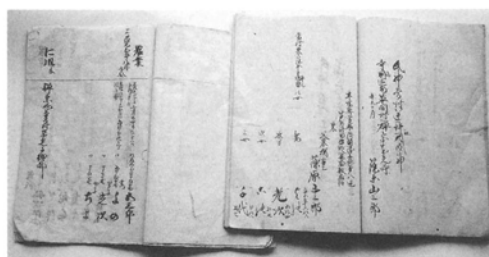
町名 \ 年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
西高師	1,040	1,540	2,054	1,818	1,965	2,104	2,135	2,290
高師	1,799	1,902	1,976	1,795	1,670	1,603	1,685	1,820
芦原	228	491	798	935	1,043	1,023	1,086	1,168
松井	273	485	959	1,101	1,098	1,142	1,257	1,293
新芦原	456	527	563	734	797	785	810	869
合計	3,796	4,945	6,350	6,383	6,573	6,657	6,973	7,440

*平成12年までは国勢調査による。平成17年は校区史編集委員会資料による。

*昭和60年、西高師・高師の減少は「団塊の世代」が転出したものと思われる。

じんしんこせき 壬申戸籍

明治4年(1871)、通達によって全国統一戸籍の申告が義務付けられ、新しく姓と名、戸主名が記載されることになった。これによって、明治5年(1872)に壬申戸籍ができた。戸籍簿によると現在の芦原校区は、明治2年(1869)、吉田領三河国渥美郡となり、明治4年豊橋県管轄第八区、明治5年額田県管轄第五大区、明治12年(1879)愛知県渥美郡、昭和7年(1932)豊橋市に合併編入し現在に至る。



<書かれている内容の一部>

(芦原新田 吉田藩)
三河国渥美郡芦原新田戸籍
明治貳年巳三月 庄屋 六三郎
芦原新田 い、ろ、は、に、 四組
合計貳拾七軒 人口壹百壹拾七人 馬七匹
(略)

校区内の主な施設



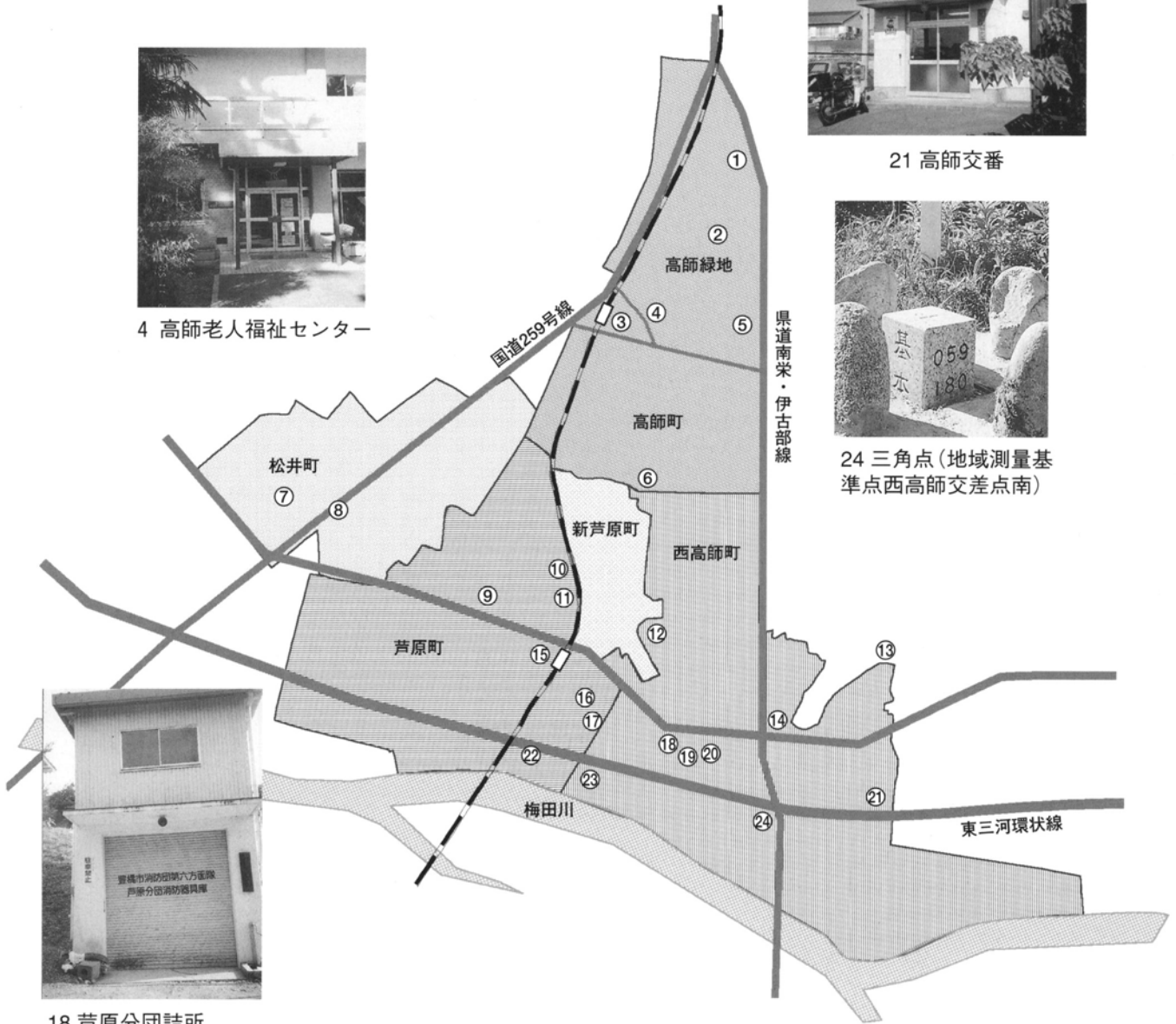
4 高師老人福祉センター



21 高師交番



24 三角点(地域測量基準点西高師交差点南)



18 芦原分団詰所

1 生活家庭館	7 神明社	13 小谷清水池	19 高師神社
2 非常用飲料地下水タンク	8 歩道橋	14 高林寺	20 西高師町公民館
3 高師駅	9 道祖神	15 芦原駅	21 高師交番
4 高師老人福祉センター	10 逆鉾社	16 芦原小学校	22 樋門(杵)
5 防災用備蓄倉庫	11 奥谷寺	17 芦原校区市民館	23 排水機場
6 高師町公民館	12 あしはら保育園	18 芦原分団詰所	24 三角点

(3) 町の発展

西高師町 昔、高足湊^{たかしみなと}として繁栄した船渡地区を中心に、1,000年以上の歴史を数える古い町である。農業教育を重んじ、産業、文化の発進地として栄える。町内は津森、船渡、西浦、小谷、沢向、白山の六つの字からなり、小谷、沢向、白山では住宅化が進んでいる。

町内には、水子地藏のある高林寺と高師神社がある。小谷地区には昔、美しい清水が湧出していたが、現在は埋立てられて公園になっている。



西高師南交差点付近の往来

高師町 町内は北新切、西沢の字からなっている。古老の話によると、昭和10年代の戸数は15~16戸で、町内会がつくれず人・地縁の係わりで西高師・芦原のいずれかの町内に入っていたとのことである。

昭和20年代は、畑に分家等の住人が、高師緑地公園内（北原）には戦災・引揚者等の住人が増え続けた。これを機に高師町内会を結成した。特に昭和40年代には、市南部地区が市街化に指定されると、車社会とも重なり市街化区域の波が高師町にも押し寄せてきた。世帯数の増加に伴い町内会の組織・運営は自主・自治が強求められた。

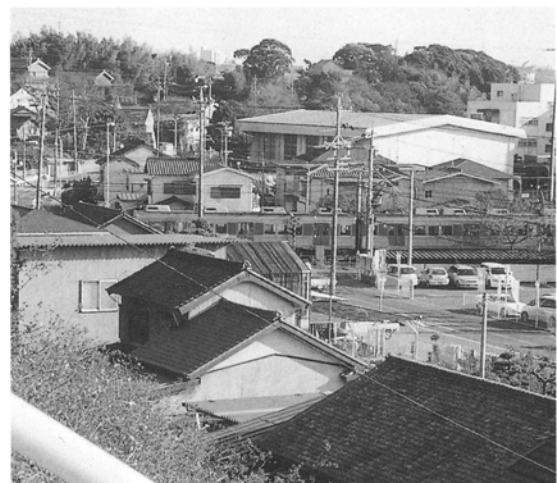
平成10年代後半の町内会は、「明るく住みよい町づくり」を目標に掲げ、21世紀を担う子供達が町内会主催の諸行事（盆踊り大会・町民祭）に積極的に参加するように、若手・

中堅の町役員のアイデア、行動力を尊重した企画・運営で取り組んでいる。



高師町内住宅街を安全登校する子ども達

芦原町 芦原新田第1期工区は、明暦3年（1657）2月の吉田藩検地が済み、芦原新田と名付けられる。同年、逆鉾社創建。以下、3区を加え、32町歩（32ha）の水田ができる。さらに山林を開拓し、18町歩（18ha）のみかん園が造成され（芦原町西上、高師町北新切）、50町歩（50ha）となる。開村時戸数17戸。昭和10年代に入ると、食料増産のため畑地は、麦やいも作に切り替えられる。昭和50年代頃より市街化がさらに進み、現在350戸で専業農家数は5戸である。豊鉄芦原駅がある。



芦原駅踏切付近の住宅街

新芦原（新芦原町と称す）豊鉄渥美線を新豊橋駅から田原行に乗り12～13分の芦原駅で下車すると、その東側県道沿いと丘陵地帯にある坂の多い静かな住宅街である。芦原駅から眺めると黒、赤、緑、青色の瓦屋根が配合よく段々に高く並んでいる。

町内は西高師町字西浦、奥谷、沢向、芦原町西上などを合わせて作っている町内会である。昭和37年（1962）当時、住宅団地造りの初期で30戸程度だった。昭和50年（1975）135戸、平成17年（2005）245戸になり、街路灯、消火器、下水道等が完備している。

将来、町として公民館が欲しいところだが、町内には土地もないため、あまり欲張らずに「よい環境とよい心」を町内の目標としている。



新芦原町内（芦原駅からの風景）

松井町 国道259号線（通称田原街道）の両側に広がる町で、戦前・戦後とも長い間30戸内外の農家を中心とする小さな町であった。しかし、昭和45年（1970）の市街化区域指定で、一気に新しい住宅が増え、現在では450戸ほどになった。

国道沿いは、自動車の販売店が軒を並べ、銀行やパチンコ、それに飲食店も多くあり、その背後は住宅が建ち並ぶ活気溢れる町となっている。

昭和56年（1981）芦原小学校の新設で、磯辺小学校から通学区域が変更となり、通学の安全を図るため歩道橋が赤根坂に架けられ、

通学だけでなく町内の人達もこの歩道橋を有効に活用している。



松井町内の国道259号線の歩道橋

俳人松尾芭蕉が貞享4年（1687）松井を通ったと言われている。また、明治9年（1876）神明社（松井神社）の遷宮記念に句会が開催されるなど、文化活動も盛んであった。

地域文化

麗々所可水大人撰（表紙）

高師邨 篠原

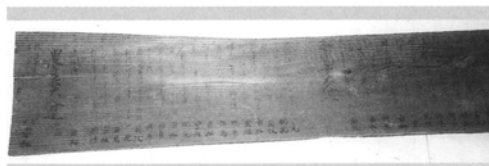
（内容）江戸時代後期句会資料。618句採録されており約10年間位の作品集。会員の2割位が女性。撰者は入選句に押印、巻元



に（主催者）に返却される。後掲の「市松」氏はこの句会の会友。

神明社 記念句会（19句）

明治十年丑八月 巻元 当所 市松



2 めぐまれた自然

(1) 豊かな緑

校区内の畑地はほぼ宅地となったが、神社寺院は樹木で囲まれている。特に、校区の北部には広大な高師緑地があり、松の木を中心とした巨樹、古木が数多く茂っている。松の古木は明治42年（1909）頃に植えられたものが約600本あり、その美しさは東海地方有数のものである。その他には、公園中央部にあるメタセコイアの並木通りと市内最大の桑の古木があり、園内を散歩する人の目を引いている。



高師緑地公園の黒松

高師緑地公園の歴史 緑地一帯の24町歩（24ha）は吉田藩御料林として山守り役によって維持されてきた。

日露戦争（明治37年（1904））の頃には、現在の南東部、芝生広場の場所にロシア俘虜収容所（明治38年（1905））が置かれ、約800名のロシア兵が生活していた。

明治41年（1908）第15師団の誘致後は、第25・26騎兵連隊の糧秣廠（馬草倉庫）がおかれたが、師団の閉団後も予備士官学校等の継続により建物は利用された。

豊橋大空襲（昭和20年（1945））で被災した市民が、元収容所建物に一時仮宿した時期もあった。

戦後は、豊橋市移管となり「豊橋市指導農場」が置かれ、農業復興支援基地（昭和20～32年）となった。畜産、特に乳牛、豚、山羊の人工授精の業務を行った。

正門は、国道259号線から踏切りを渡るとすぐ入口であった。メタセコイア並木通りの西端のわずかな石垣が跡を残している。

松の幹に残る傷あとは、太平洋戦争末期にガソリン代替品「松根油」を採取した名残りである。

現在、公園内には多くの施設があり、市防災用備蓄倉庫、非常用飲料水地下タンクなど、市民健康増進諸施設がある。



大戦中の松根油採取のあと



公園内のメタセコイア



豊橋市指導農場正門の石垣跡

校区内にある巨樹・古木



クワ（高師緑地内・枝はり 16.5m × 16.5m、高さ 11.0m、推定樹齢 100 年以上）



スダジイ（高師神社内・推定樹齢 400 年以上、この森を代表する木であり幹周りは 390cm ある。）



ヤマモモ（逆鋒遊園内・推定樹齢 400 年、幹の中心部は空洞になっているがその周りは 410cm ある。）



マキとクスノキ（奥谷寺境内・推定樹齢 250 年以上、マキは市内でも古い方である。）

(2) 芦原の野原

野草 校区内の農道や土手などには、セイダカアワダチソウやアメリカセンダングサなどが繁茂している。その他にはタンポポ、ヨモギ、ススキ、オオバコ、アシ、スギナ、ドクダミ、ヒエ、セリ、タデ、ガマ、ユリなどがみられる。ナデシコは最近あまり見かけられない。



芦原の由来となったアシ

動物 校区内の山林地等では昭和20年代の後半頃までノウサギ、ハクビシン、タヌキ、イタチ、モグラ、カヤネズミ、ドブネズミ、コウモリなどが多く見られた。

また、野鳥の多くはスズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、ツバメ、ハト、ホトトギス、トビ、キジ、カラス、モズ、ジョウビタキ、カワウ、コチドリ、コサギ、アオサギ、カモ、ヨシキリ、セキレイ、メジロなどがある。悩みは、カラスのゴミあさり、ヒヨドリがキャベツや白菜などを



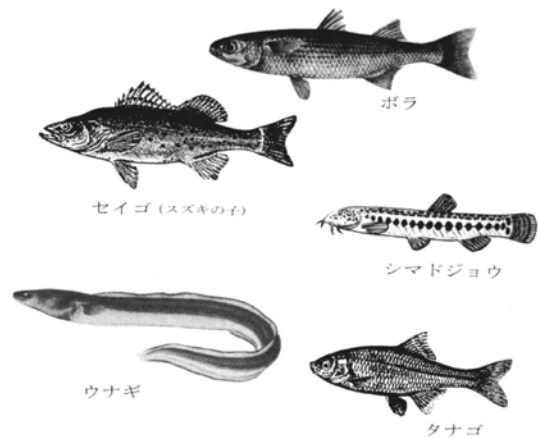
アオサギ

食いあらすといった被害である。

また、水田では、ジャンボタニシによる被害がでているため、防除対策が求められている。

川の生き物 昭和20年代までは、梅田川の水質がよくフナ、タナゴ、モロコ、ハヨ、ウナギ、ボラ、セイゴ、ハゼ、ヤゴ、コイ、ナマズ、シマドジョウ、メダカ、シジミ貝などが生息していたので、子供達は水遊びや魚捕り、貝拾い、魚釣りを楽しんでいた。

昭和40年以降は、団地造成と家庭排水の増加や農薬などの使用により、川や水田の生き物が少なくなっている。



梅田川の生き物

近年になって、行政の指導や住民の生活改善意識の向上により、各家庭での浄化槽や下水道の普及が図られた。農家も農薬の規制を順守することに努めた結果、水田や用水路にカワニナが戻り、黒メダカやホタルの幼虫がみられるようになった。ホタルが梅田川の支流や芦原用水路、水田を飛びかう日も近いと思われる。



ホタルが飛び交う用水路

3 災害

(1) 地震

安政地震 安政元年（1854）、M8.4、吉田城倒壊、三河湾に大津波襲来、家屋流失多数、道日記地区（大山町）は松井に屋敷替えした。神社も移転した。浜海道船原（浜道町）の一部は高地へ屋敷替え（移転）した。

東南海地震 昭和19年（1944）12月7日午後1時30分発生、M8.2、震源地は熊野灘沖で震源浅く、東海地方に大被害を及ぼした。死者871人、全半壊家屋15,000棟、余震が1日に何回もあり、農家などでは藁（ワラ）で囲った小屋（地震小屋）に寝泊まりした人もいた。

三河地震 昭和20年（1945）1月13日午前1時30分頃発生、M7.8、震源地は三河湾、余震が3ヶ月続く。三河湾沿岸部、特に幡豆郡、知多郡に倒壊家屋が多くでた。

(2) 台風

台風13号 昭和28年（1953）9月25日、紀伊半島に上陸後、伊勢湾を経て16時30分頃知多半島に再上陸した。この台風による市内の被害は、柳生川をはじめ海岸堤防決壊40ヶ所、一瞬にして家や田畑を押し流した。

伊勢湾台風 昭和34年（1959）9月26日超大型台風は未明、潮の岬上陸後、伊勢湾、名古屋市を満潮時に通過したため、高潮と重なり、小型船もろとも木材多数が住宅地まで押し上げられ被害を大きくし、死者が多数出た。

豊橋市では、瞬間最大風速45m、総雨量225mmを記録した。芦原校区の水田は、梅田川から取水している大井用水から溢れた水に稲がなぎたおされて、数日間水に浸かった所もあった。畑の農作物は流水で流された。ま

た、土が流されて畑には溝が何本もできた。屋根瓦やトタン板が飛んだ家も多数あった。

芦原校区内には、台風時の増水に備えて第一、第二排水機場がある。その他、樋門2ヶ所が常時活動中である。

(3) 竜巻

平成11年（1999）9月24日午前11時頃、野依地内で発生し西高師町津森を縦断、上野町、舟原町、大村町を経て豊川市北部に達する最大級のものであった。

通過地点の西高師町地内では、走行中のトラックが横転したり、梅田川堤防から転落したのもあった。津森地区では家屋全壊2棟、半壊17棟、その他多数の被害があった。



西高師町付近

(4) 急傾斜地危険地域指定

松井町、芦原町、西高師町の一部が基準値以上に該当している。昭和47年（1972）危険地域指定となり、国、県、市の補助を受け防災工事を終えた。それ以後も監視体制を継続し、建築制限も続いている。



芦原町七曲り坂付近

第2章 歴史と生活

1 芦原校区のあゆみ

(1) 大むかしの芦原

高師原の狩人たち 先史時代、高師原・天伯原一帯は、ゆるやかな起伏が続く海拔30mほどの丘陵地であった。

鉄や銅などの金属の利用を知らないこの時代の人たちは、木、竹、石、動物の骨や角、貝殻などを材料として道具を作った。木や竹製品は低湿地の遺跡から、骨角製品は海に近い貝塚から多く発見するが、赤土や砂礫の多い高師原や天伯原から発見された出土品のほとんどは石器と土器である。

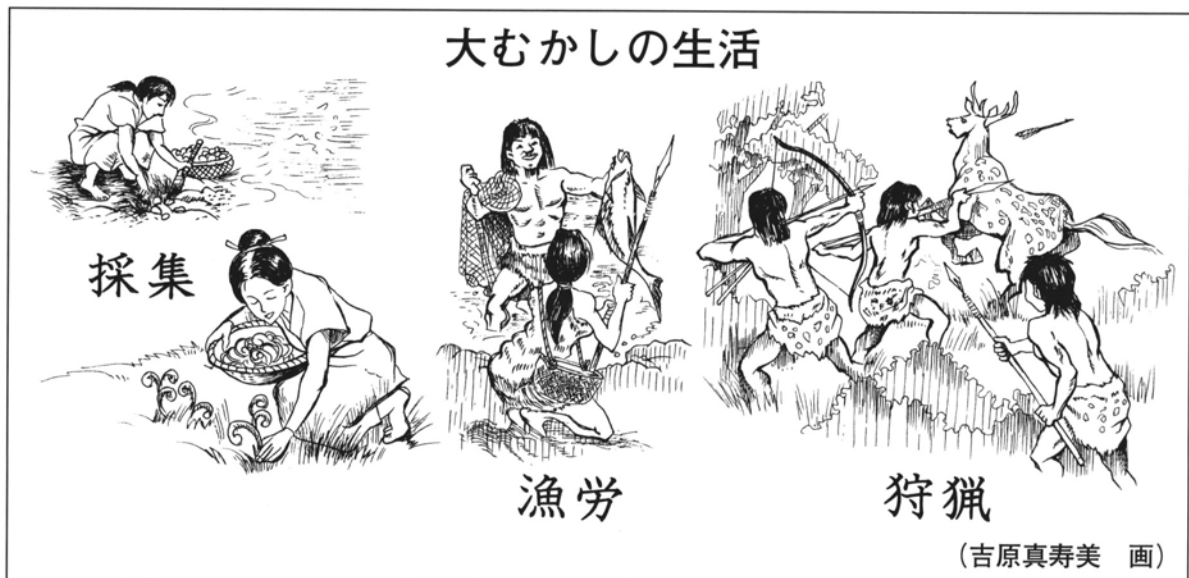
戦後、西高師町の植村春末氏は、小谷池（現小谷公園）の北東にあった畑から石のヤジリ（石鏃）を多く発見した。近くの高師本郷町竹ノ内や上分、浜道町百々池などからも石器や石のヤジリが発見されていることから遠



高師本郷町竹ノ内出土の石のヤジリ

い昔から、この辺りで狩りをして生活していたことが想像できる。

時代が進み、鉄の道具が使われるようになると自然採集の生活から農耕定住生活へと変化して行った。村も大きくなり、多くの土地を持ち人々を支配する者も現われた。このような人のお墓が古墳である。梅田川の流域にも多くの古墳が発見されている。上流の谷川古墳群、中流の大岩古墳群、下流の車神社古墳は代表的なものである。残念ながら芦原校

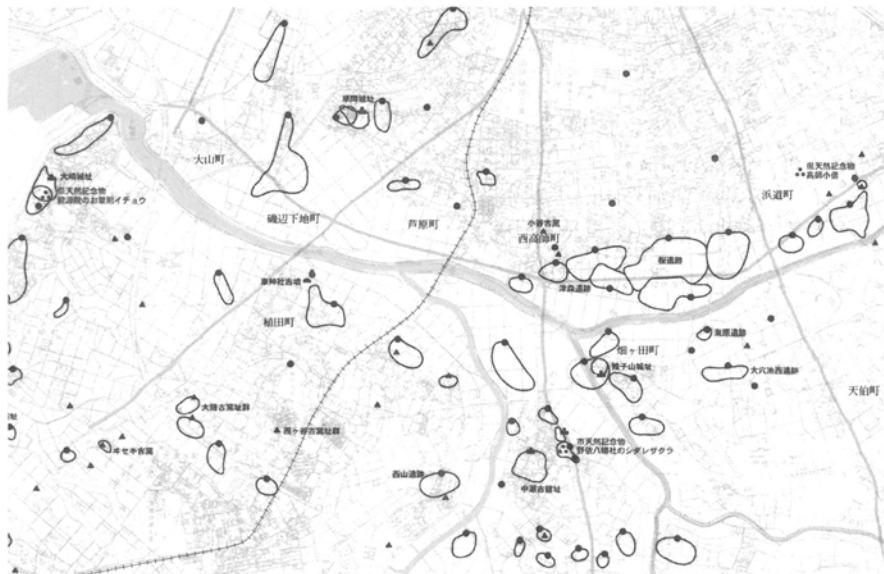


区には古墳と確認できるものは発見されていない。

湧水（清水）と窯業 梅田川の段丘の端から多量に湧き出る清水があちこちにあった。芦原校区内の西高師町にある小谷や津森も湧き水の出たところである。また、畑ヶ田町の亀井、高師本郷町の神井は現在も地名として残っている所である。これらの湧き水は古くは田畑の灌漑用としても使われた。また、旅人たちの喉を潤したことだろう。こうした清水の周辺には、遺跡が多く発見されている。

昭和51年（1976）8月梅田川中流域の遺跡分布を調査していた日本考古学会員、伊藤憲氏は、西高師町小谷で偶然、土地造成工事中の現場に遺跡の混合した灰層の露出しているのを発見した。市教委の要請を受け、土地所有者の許可をもらい発掘調査を始めた。調査は地元の研究者はじめ、校区総代会、小中学校の児童生徒、PTAなどの協力があり、42日間にわたり行われた。固く焼けた窯壁や焼き損じた碗や皿などが多く見つかった。詳しいことは分かっていないが、平安時代のものではないかといわれている。

この小谷古窯製品は各地に運ばれたものと



梅田川流域の遺跡分布図

推察されていたが、最近になり波入江（老津）、



西高師町小谷古窯の発掘

西川（西郷）、天王（豊川）、桜（豊川）、篠束（小坂井）の5ヵ所で確認された。

三河国「渥美郡高蘆郷」 ^{たかしごう} 平安時代の三河国（国府は今の豊川市八幡町）は碧海、加茂、額田、幡豆、宝飯、渥美、大海、設楽の8郡があり、その下の郷（村）は69と記録されている。渥美郡には6郷があり、その1つが高蘆郷である。高蘆郷は梅田川を中心として、高師から二川、天伯方面にかけての広い地域だと考えられる。

大化の改新によって班田制も整ったが、次第に崩れて、三河国にも荘園（貴族や寺神社の土地）ができてきた。

三河国は伊勢神宮の神領（神社の土地＝荘園）が多いところであ

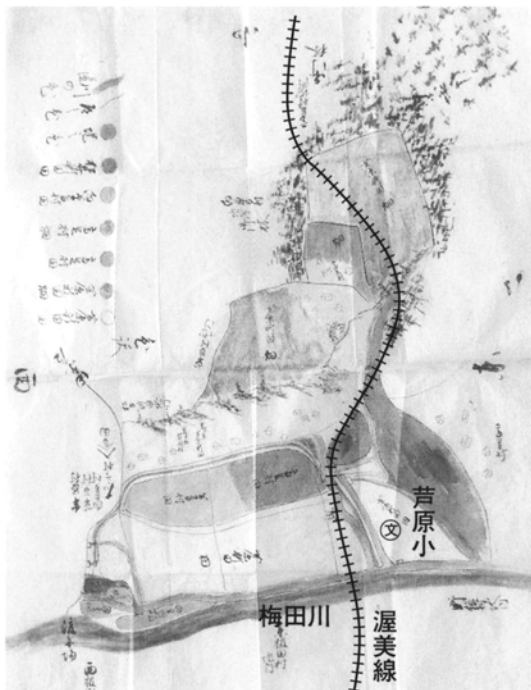
った。特に渥美郡は昔から伊勢との関係が深く平安時代の末には、郡内のほとんどの耕地は神領となっていた。伊勢神宮の文書に、高足御厨（御厨とは伊勢神宮の神領）という名前が見られることから、梅田川の兩岸はかなり早くから開けていたのでないかと思われる。

(2) 芦原村のはじまり

吉原弥次右衛門の新田開発 梅田川(六田川)は、遠州敷知郡梅田村(現湖西市)から西流して渥美郡二川、高足村を経て植田磯辺両域の境界を流れ、大崎村地先の海岸に注ぐ総延長15kmの川である。近世初頭までは海が入り江となって、深く湾入していたが、堆積作用によって広大な入り江が浅くなり、新田開発には好適地になっていた。

吉田藩では藩主水野忠清によって梅田川右岸に新田開発計画がなされた。しかし、洪水や津波にあって完成せず、また水野忠清の松本移封もあり中止された。

以後、当分開発しようとする者がいなかったが、明暦2年(1656)遠江国敷知郡利木村(現湖西市知波田)の住人、吉原弥次右衛門重次(初代)が一族の人たちと相談し新田開発に取り組み、梅田川右岸の開発に成功した。これが芦原新田である。



元禄年間(1690年代)の芦原新田の絵図
(庄屋、篠原家所蔵)
新田の田畑、高札、奥谷寺、逆鉾社がみられる

芦原新田の開発は、現豊橋市域の新田開発の先がけをなすものであり、大変意義深いものがある。

○梅田川流域付近の新田一覧

新田名	開発年次	現町名
中原新田	元和7年(1621)	中原町
船渡新田	元和8年(1622)	船渡町
芦原新田	明暦3年(1657)	芦原町
小松新田	万治2年(1659)	小松町
松井新田	寛文2年(1662)	松井町
津田新田	寛文6年(1666)	植田町
藤並新田	寛文8年(1668)	藤並町
森田新田	元禄11年(1698)	南栄町
彦坂新田	元禄13年(1700)	大清水町

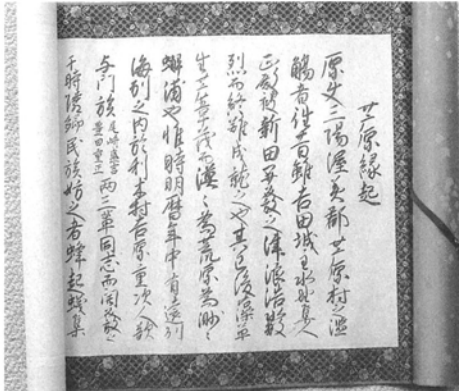
元禄3年(1690)高足村円通寺住職は、新田開発の様子を「芦原縁起」に残している。

その大要は次のとおりである。

『吉田藩主水野忠清による新田開発計画が中止された後、梅田川右岸は藻草や葦などが生い茂る湿地帯となっていた。

明暦2年、吉原弥次右衛門重次(初代)が一族である尾崎盛吉、豊田重正と図り、時の藩主小笠原忠知に開発許可を得たうえで人夫を集め開発に着手した。しかし、この地域は高師村・植田村の入会地であったために工事妨害が発生した。これを聞いた藩主が仲介に入り決着し、翌3年に開発は成功した。工事に「枳いり」(排水設備)という技術を数ヶ所に設置したことが成功の要因であったといわれている。この新田が芦原村のはじまりである。

その後、開発は2代目、3代目に受け継がれた。再三にわたる津波、洪水のために堤防が決壊したが、それにも屈せず3代弥次右衛門の時、新田20町歩(20ha)、畑10町歩(10ha)ほどが完成した。』



芦原縁起 (吉原克己氏蔵)

寛文7年(1667)の年貢免状(年貢割当証文)によれば村高は198石余りで免(年貢の割合)は三つ(三公七民)とされた。なお、正徳2年(1712)の高足村差出帳では田畑高303石余りに増加し、家数14軒、人口106人、入作8戸となっている。

持高の最高は開発主である弥次右衛門が全体の32%にあたる84石余り、ついで一族の孫兵衛が56石余り、七兵衛が39石余りとなっており、この3人の合計は68%となった。

また、明暦3年(1657)つくられた逆鉾社と元禄10年(1699)につくられた奥谷寺は芦原新田を開発した吉原弥次右衛門の発願によって建てられた。

たかしみなと
(3) 高足湊 (西高師町船渡)

梅田川の船着場と問屋 江戸時代には、梅田川沿いの高足村、大崎村、草間村に湊があった。中でも中核になっていたのが高足湊(現・西高師町船渡)である。

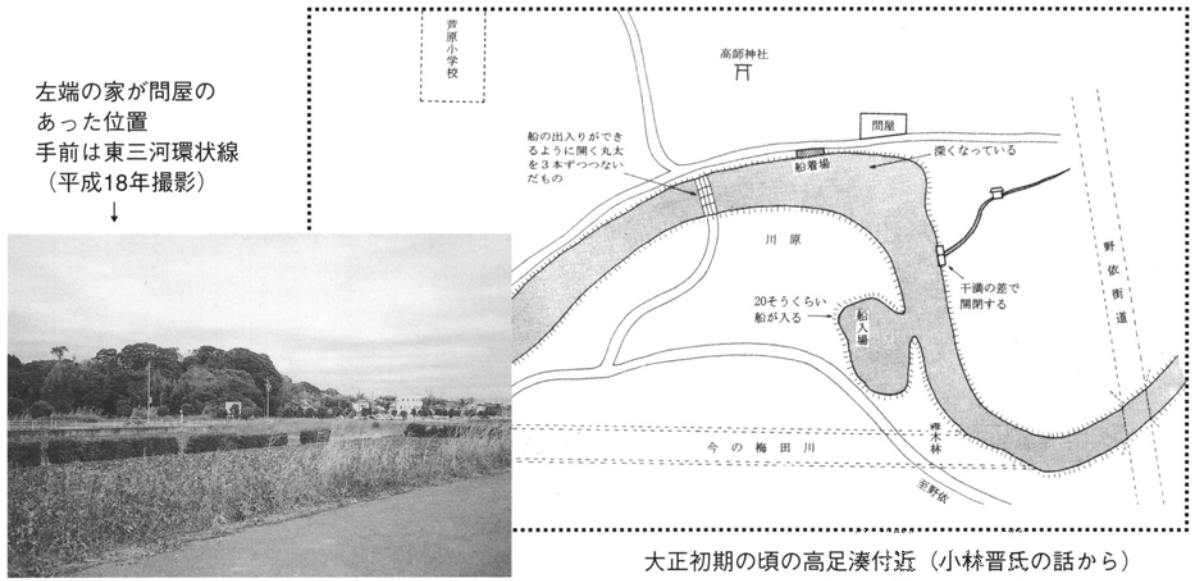
当時の梅田川は現在の野依橋あたりで大きく曲がり高師神社の森の裾まで広がっていた。高足湊は20~50石ぐらいの大きな船も入り、船着場には問屋もできていた。

船着場には高札が立ててあり、白地の厚い生地に墨で「御用」と書かれたのぼりがあったそうだ。

高足湊が海上交通の要所であったことは、東七根の朝倉宇左衛門所蔵の「代々相続書き写帳」に、文化2年(1805)七根村の年貢米を高足湊の問屋藤次郎の手を経て出したと記録されていることからわかる。

また、他の記録には、高足湊に集められた年貢は御馬湊(宝飯郡御津町)へ海上輸送されたとある。そして海路江戸に回送された。

梅田川も昭和4年(1929)から改修され、現状のような直線になり、高足湊もなくなった。

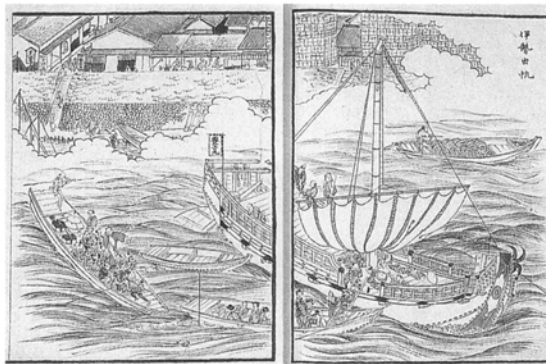


大正初期の頃の高足湊付近 (小林晋氏の話から)

伊勢参宮の紛争 江戸時代の東海道の宿場、吉田宿（豊橋市）船町に吉田大橋と吉田湊があった。吉田川（豊川）の舟運の終点として、さらには、伊勢をはじめ遠く江戸への航路の起点として繁盛をきわめていた。

その主な理由として考えられるのは、吉田川の上流地方から川下の吉田湊へ積み送られる山荷物（材木など）と吉田湊から渡海する運賃などに対する上前（手数料）徴収の権利が与えられたからである。しかし、これがもとでほかの宿村との間にしばしば紛争が起きた。

特権が与えられた経緯は元禄2年（1689）の船町の庄屋与次衛門の口上書によれば、『関が原の合戦に際し、延べ80艘ほどの船を出し協力した功績が、吉田城主池田輝政に認められて船役（船番組）を命ぜられ、地子免除と各種荷物積み出しと利用する旅人から「上前料」（手数料）の徴収特権を得た。』寛政10年（1798）の文書によれば、運賃の2割を上前銭として徴収することが記されている。その特権は以後もずっと継続されていたようである。



吉田湊から伊勢へと向う帆船
(小船から乗り移ろうとしている)

すぐ目の前で吉田湊が荷物や渡海する人の取り扱いで莫大な収入のあるのを見ていた前芝村や下地村の人々はとうてい納得できるものではなかった。

前芝村は寛文4年（1664）、下地村は寛文10年（1670）に吉田湊との間で紛争が起きた。勝手なやり方を船町側から町奉行に訴えられた。いずれも訴えが認められ、他村には取り扱いが許されなかった。

こうした紛争は吉田川周辺だけでなく、梅田川流域でも起きているが、これらは伊勢参宮についての紛争であった。



旅人の服装と持ち物

（当時、吉田湊から伊勢参りをする旅人は年間3～4,000人もいた。しかし御蔭参りのあった享保15年（1730）の5月上旬から8月上旬までの3ヶ月に38,800人余りが吉田湊を往来した。船賃は一人66文で2割の13文が上前銭となり莫大な収入となっていた。）

高師村は近国近村の者と相談して、多数の参宮人を集めて伊勢に向けて出船していた。

吉田湊の船番組は、高師村による渡海によって、吉田湊の渡海が減少していると町奉行所に訴えた。結果は言い分が認められ、高師村からの渡海は禁止された。しかし、翌年からは高師村の下流の大崎村から毎年参宮船が出るようになったが、元禄8年（1695）には高師村と同じように、町奉行所の訴えで同様の理由で禁止された。さらに、文化5年（1808）にも再発したが、禁止されたのは言うまでもない。また、文化11年（1814）には大崎村に

近い草間からも伊勢渡海の船を出していることがわかり、直ちに中止命令が出され、庄屋太七は外出禁止となった。

このように船町吉田湊の特権は長く守り通されていたことがわかる。見つければ禁止、お咎めがあると知りながらその禁を犯したことは、いかにこの特権に魅力があり、不公平なものであったかを物語っている。

(4) 農民のくらし

庄屋源吉 高師小学校の西隣にある円通寺の山門を入ると、正面に小高い所があり、三基の碑が建っている。その中央が義人庄屋源吉の頌徳碑である。

源吉は宝暦2年(1752)に生まれ、明和6年(1769)、18歳で高師村の庄屋になった。

源吉は、村民の窮乏を救うため、その年に藩主に減租を願い出た。藩主は役人に命じて検見

をさせることにした。野依橋まで役人が来た時、その先の「畑ヶ田」だけが豊作だったのでそこは検見されると困ると思いつき、お腹が痛くなったと言って仮病を使ってうずくまり検見を免がれた。

翌7年(1770)は、5月から7月までほとんど雨が降らず、大凶作となった。伝承に残る高師村庄屋源吉の騒動はこのときに起きた。

源吉は、柱良村、小浜村、植田村の庄屋と



円通寺にある
庄屋源吉頌徳碑

ともに藩に減租を嘆願した。役人の圧力に屈した他の庄屋が脱落した後も、源吉だけは執拗に嘆願を繰り返した。その様子を聞いた藩主松平信明は、役人を使わせ検見をさせた。

不況作の報告を受けて田租138石を免除した。しかし、源吉は強訴と検見役人を欺いた罪を咎められ牢送りとなり、死罪を宣告された。

それを知った村人たちは源吉を救おうと悟真寺、龍拈寺、東別院の和尚らに助命を嘆願した。三ヶ寺や村人たちの努力が実って源吉は死罪を免れ、舟原の地に幽閉される身となった。しかし、5年もの獄中生活で病み衰え、安永5年(1775)、25歳の若さで生涯を閉じた。

その後、村人は源吉の徳を称え、円通寺で毎年7月1日に施餓鬼供養を営むようになった。

源吉の墓は奥谷寺の墓地にひっそりと建っている。墓には「殊山了勝上座」と法名が刻まれ、源吉の名前はどこにも見当たらない。

「殊山了勝」というのは、生命を投げ出して人のために尽くしたような人々につける法名だと

言われている。たとえ、村人のために尽くした人でも藩のお咎めを受け、一度死罪を言い渡された人の墓をおおっぴらに建てることはできなかったようだ。芦原新田を開いた弥次右衛門の子孫が源吉の霊を哀れんで死後を弔った。

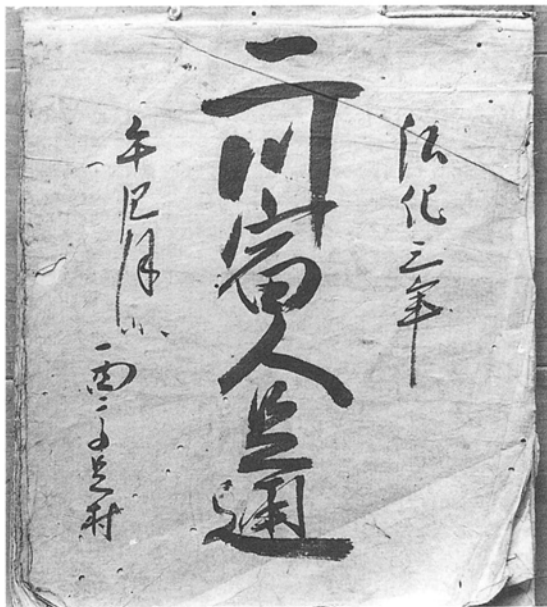


円通寺にある
庄屋源吉頌徳碑

助郷の苦しみ 旧東海道では100人、100疋ひきの人馬を毎日用意することが、宿場のきまりだった。

世の中が平和になると、人や荷物の行き来が激しくなり、宿場で用意された人馬だけでは、不足することが多くなってきた。そこで、幕府は宿場近くの村々に、人馬の足りない分を助ける機能を持たせるという「助郷制度」を定めた。助郷制度とは幕府が諸街道の宿場保護、人馬の補充のために宿場周辺の村々に課した夫役のことである。はじめは、臨時の人馬徴発であったが、参勤交代制度の確立や交通量の増加に伴って、次第に日常化していった。

助郷の負担割合は享保10年（1725）の二川宿助郷帳から、高師村を例にとると、村高は1873石、助郷高1047石であった。村高100石に対して、2人と2疋（高師村では20人と20疋）の人馬役が課せられた。各村に割り当てられた人馬数は、さらに村人各自の持高に応じて配分された。



人足通（高師村は二川宿の助郷村だった）

助郷課役の時期が農民にとって多忙な農繁期が多かったこと、人足は16歳から60歳で、

馬は若い馬であること、そしてこの伝馬御用は何をおいても務めねばならない大事な仕事であっただけに、農民の受けた打撃は大きかった。さらに、川除普請、橋場普請もしばしばあり、助郷の村々は困窮した。



人足の仕事
（問屋場で公用荷物の継立をする）

こうした負担を軽くしよう、何とか逃れようと宿方と紛争が繰り返された。

双方の言い分は、助郷方は必要以上に要求する、宿方は助郷方からの出し方が少ないので多く割り当てたというもので、水掛け論が毎年のように続いた。

ついに助郷方は我慢しきれず、寛政6年（1794）二川宿助郷の高足村をはじめ3人が江戸に出かけ、二川宿を相手取り、道中奉行に訴えるまでになった。このときは宿方から示談の申し出があり、紛争はようやく治まった。

以後、文政4年（1828）、天保2年（1831）をはじめ何度も同様のことが繰り返されている事実からもこの課役の重みが想像できる。

明治5年（1872）、問屋場と助郷およびこれに関する一切の課役が廃止され助郷制度は消滅した。

農民は、幕府による助郷だけでなく、藩主による重い年貢にも耐えなければならぬという二重の支配を受け続けていたことになる。

(5) 戦時下の高師原

日露戦争と俘虜収容所 日露戦争は明治37年(1904)2月から1年6ヶ月に及び、ロシア軍には俘虜(捕虜)として日本軍に捕らえられる者が多くでた。彼らは順次日本に送られてきた。同年3月に俘虜収容所がまず愛媛県松山に開設され、以後日本全国29箇所に増設された。

明治38年(1905)2月には11番目として関屋町の悟真寺などに豊橋俘虜収容所が開設され、3月には将校と従卒各40名が到着した。続いて800名の収容が命ぜられ、収容所の候補地として幾つか挙げられたが、最終的に高師原の軍用地の一角(現在の緑地公園の片隅)に俘虜収容所が建設されることになった。5月、8,500坪(28,000㎡)の敷地に200名を収容する収容所(612㎡)4棟、それに衛兵所、医務室、パン製造所など建物は全部で16棟が完成し、これを豊橋俘虜収容所高師原収容場とした。



収容されたのは、下士級の兵卒であり、将校を収容した本部の悟真寺などとは何かにつけて区別されたという。収容所内では、演劇も上演されるなど待遇は「俘虜取扱規則」の遵守により決して悪くはなかった。同年9月ポーツマス講和条約が成立すると取扱いは緩和され、外出して買い物をしたり、旅行する者も増え、帰国前の自由な生活を味わう光景も見られた。11月に入り、将校送還から始ま

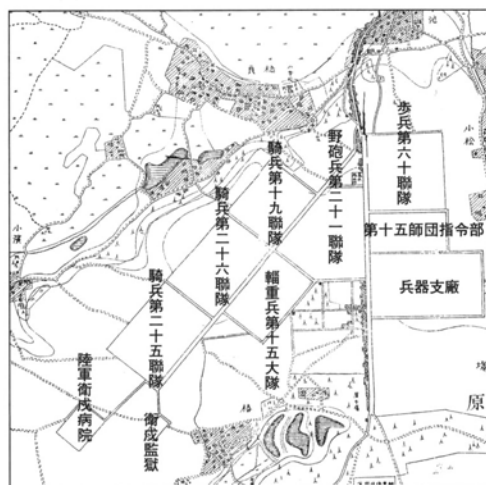
り、高師原収容場の俘虜も順次送還され、収容場は閉鎖された。

その建物は、その後の「高師原演習廠舎」として各地より演習に来る兵士の宿泊施設として使用されるようになった。

『戦後になり、元高師原収容場の一部は開拓事業関係者の住居や公共の高師町公民館としても使用されていた。敷地内には高師町神社や盆踊りもした町内の広場もあった。また、お茶、鋳物、マオラン、コンクリートなどの工場もできしばらくの間は仕事をしていましたが、やがて他の土地へ移転していったよ。』と80歳になる鈴木正美さんは話してくれた。

軍隊と高師原 日露戦争後、第15師団が東海道本線に沿ったところに置かれることになった。高師・天伯原のある豊橋、三方原のある浜松、各務原がある岐阜、東京に近い沼津などが師団を設置してもらおうと熱心な誘致運動をした。明治40年(1907)3月21日、陸軍は最終的に豊橋に決定した。

師団の兵営建設は、現在の愛知大学周辺に急ピッチで進められた。また、師団ができるまで道路整備が必要となり、田原街道、大崎街道、小松原街道が拡張された。また、師団司令部から柳生橋までの小池新道もつくられた。



第15師団敷地図
(福岡村、高師村、磯辺村にまたがっている)

明治41年（1908）11月16日、高師の師団司令部で開庁式を行った。翌17日には練兵場で師団の歓迎会が開かれて、終日祭り気分だった。やがて、訓練の場として整備され、高師、天伯原は日本でも名高い陸軍の大演習地となっていた。

また富本町から小池町にかけ、酒屋、食堂、写真屋、土産屋、旅館などもでき、急速に発展していった。

高師原には馬を使う部隊が多くおかれたので、給水飲馬場や陸軍糧秣廠（馬草倉庫）、演習時に使う廠舎（現在の緑地公園内）がいく棟かできた。演習は年中行事になり、大正7年（1918）10月には高師原陸軍特別大演習が行われた。



高師原における陸軍の演習

芦原校区は演習地には入っていなかったが、銃を担いだ兵隊さん、馬に乗った兵隊さん、梅田川で馬を洗っている兵隊さんの姿はよく見かけたそうだ。

第一次世界大戦が終わり、世界的な軍縮の影響で、第15師団も大正14年（1925）に廃止された。しかし、騎兵隊第4旅団（第25・26練隊）は対象からはずされた。新設の高射砲練隊、陸軍教導学校（後の予備士官学校）陸軍病院、兵器庫、補充馬廠などができた。そして、高師、高師原は演習地として昭和20年（1945）の終戦まで続いた。

戦時中の生活と供出 昭和13年（1938）、戦争遂行を目的とした国家総動員法ができた。「欲しがりません。勝つまでは」「贅沢は敵だ」などを合言葉に戦時体制が推し進められていった。しかし、戦況は苦しさを増し兵器の原料となる銅、鉄類が日増しに減少していった。



金属回収令が出され、一般家庭からも供出

昭和17年（1942）には金属回収令が出された。公共の金属金物類は取り外され寺院の釣鐘や一般家庭の鍋、釜類まで供出の対象になった。また、同年には経済統制の方法として「配給制」が実施され、生活必需物資が自由に買えなくなった。さらに農家に対しても米、麦、甘藷などの供出割当量はしだいに増えていった。食糧の増産をしなくても人手がないうえに肥料はなく、自給堆肥や糞尿に求めるありさまであった。末期になると石油不足も目立ち、さつまいもからアルコールを取ったり、松の脂を精製して飛行機の燃料にしようとした。高師緑地公園にはノコギリで切込みがつけられた傷の残る松の木が今も残っている。

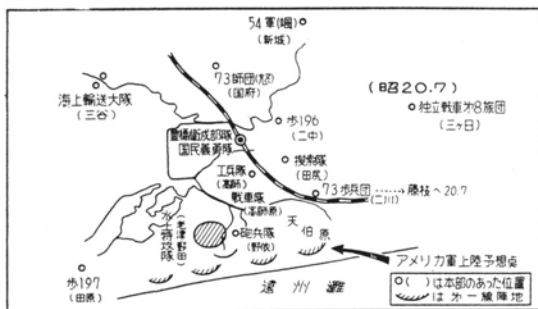


砂糖の買出し
（昭和15年・生活物資が不足し、配給制度となる）

本土決戦と芦原 昭和19年（1944）、本土決戦が避けられない状況になり、東海地方に第13方面隊が編成され、名古屋に司令部が置かれた。

豊橋の正面、太平洋岸の防衛にあたるのは主として第13方面隊に編入された第73師団（通称は怒部隊）が担当することになり、各所に分散して部隊をつくり、訓練にあたった。

まず、表浜海岸の断崖など特殊な地形を利用して水際で撃滅しようと洞窟の陣地の構築に力を入れた。また、急きょ大清水に飛行場の建設が陸軍から発表され、高師町からも大勢の人が、スコップやジョレンを持って建設作業に出かけた。当時は労働力不足であったので学徒も動員された。



豊橋正面の軍防衛（本土決戦に備える）

『赤羽根町の高松で本土決戦に備えた怒部隊の陣地構築を手伝った。東三河の各地区から集められた120名くらいの学徒が赤羽根渥美農場で寄宿しながら作業をした。食事の世話をする班、スコップで人間一人が入れるぐらいのたこ壺を掘る班、兵隊が爆破した石をモッコで担ぎ出す班、・・・10人一組で分担した』
高師町の豊田正人さん（76歳）は当時の様子について語ってくれた。

作戦は後退配備も考えられていた。芦原にも二連機関砲が据え付けられ、天伯の法事堂と西幸にはトーチカ陣地も作られた。右上図

のように、松井・芦原・西高師の台地上の林一体には塹壕通路が掘られた。また軍隊用の大きな防空壕も奥谷寺の周辺や西上の谷に構築され、現在も塹壕通路の名残が奥谷寺に見られる。



推定図 芳賀不二男

軍隊の食糧事情は極めて悪化してきた。昭和19年夏には、食糧不足を少しでも緩和しようと、高師・天伯原にいた各部隊から選抜した人員により農耕隊を作り、スコップ、くわ、鎌などの農具や軍馬、荷車を使ってさつまいも畑の開墾を行った。散兵壕にもなるように1mほどもある大きな畝を作り、さつまいもの苗をさした。肥料は豊橋補充馬廠から貰い受けるようにした。切迫していた当時の様子がかがえる。

松井町に落ちた焼夷弾 昭和20年（1945）6月19日の豊橋空襲の夜、植田町、大山町に続いて松井町にも大型の油脂焼夷弾が落ちた。その家の家族が防空壕から飛び出すと、50cmから1m間隔位に油脂が飛び散ってめらめらと燃えていた。家族と隣組の人たちで天水桶の水をかけたり、火叩き棒を濡らして叩いたりして消火したが、手が回らなく物置を全焼した。

火を吐いた焼夷弾の抜け殻は、隣家の藁屋根を突き抜け、床下に突き刺さっていたが、幸いに人畜に被害はなかった。



決戦に備えた家庭の準備

怖かった爆風（昭和20年6月24日）

家の防空壕に家族6人がはいていたけど、警報が解除されたので、母親に言われて神明川に洗濯に出かけた。洗濯を始めてまもなく梅田川の鉄橋の方に飛行機が来た。急いで防空頭巾をかぶったとたん、頭上で「ゴォー、ダダダ、…」と表現できないすごい音、すごい爆風…、田の土が飛び散り真っ暗闇になった。川の水が飛び散った。田の土でバタバタと激しく音を立てた。私は転がるように家の防空壕に駆け込んだ。

そこには誰もいなかった。かすかに「房江、房江、房江」と呼んでいるような気がした。身震いがし全く動けなかった。しばらくしてからだと思うが、母親が私を見つけ、「生きておったか、よかった、よかった助かったなあ」と叫びながら抱きしめられた記憶がある。

母親は神明川で履物や洗濯物が散らかっていたので死んだと思い、お前まで取られたら（長男一豊さんは戦死されている）どうしようと思ったそうである。一日外泊の許可をもらって隊に戻る途中の兵隊さん（野依町の佐藤實さん）が、野依橋の近くで自転車に乗ったまま、なくなっていたとの話を後で聞いた。

私は、大ショックのために2～3日動けなかった。

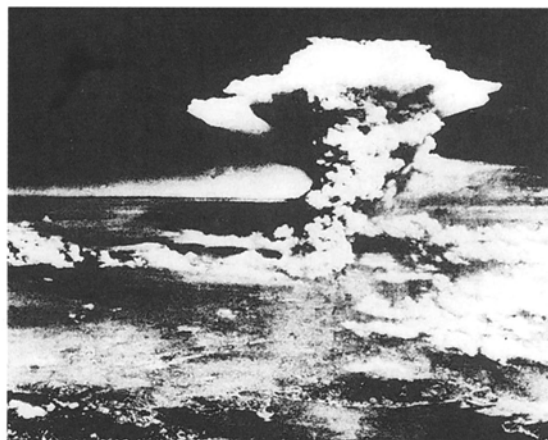
戸沢（鈴木）房江 74歳（三ツ相町）

艦載機の銃撃 あれは桜の花が咲きかけた頃のことだった。黒橋の近くの畑で仕事をしているときだった。

突然艦載機が来て機関銃で撃ってきた。もうびっくりした。松林の中に逃げ込み伏せた。ビシィ・ビシィと松の木に弾が刺さってとおりにすぎた。怖かった。

*黒橋とは渥美線の大東園横の橋。この付近の谷には戦車壕などがあった。

山下こと 90歳（芦原町）



原子爆弾の「きのこ雲」は、九千メートルの高度になった。

きのこ雲を見た 昭和19年5月23日、高師神社で武運長久を祈願し、大勢の人たちに南栄まで行列で送ってもらった。

豊橋駅から鈍行列車に乗り、広島県まで行き、大竹海兵団に入隊した。3ヶ月間の厳しい訓練が続いた。特に忘れられないのは、カッター訓練だった。両手の血豆が破れ、その下の血豆が破れても誰も愚痴を言わずに連日の訓練が続いた。訓練の仕上げとして2日間かけて宮島の赤鳥居まで12チームが競争し1位でゴールインした。その時は嬉しかったなあ。

昭和20年8月6日は呉の吉浦から広島のかきこ雲（新型爆弾）を見た。今でもはっきりと思い出すことができるが、後になって原子爆弾だということがわかった。やがて終戦になったが、輸送艦に乗っていたので、すぐには解散にはならなかった。

昭和20年12月5日やっと豊橋の自宅にたどり着いた。

志願兵 林 昭一 77歳（西高師町）

庭から見た艦載機 父親が「警報が出たぞ、すぐ入れ」とよく言ったけれど、いつものことなので防空壕にすぐには入らなかった。縁側から南を見ていると、艦載機が超低空で大崎の飛行場を目指していった。乗っている人の姿が見えた。飛行場から黒煙が上がり、避難した日本の飛行機が上空を旋回するのを何度も見た。

隣にいた兵隊さんが、「日本もB29より大きな飛行機を作っているぞ」といっていたけれど、じきに終戦になってしまった。

M・H 71歳（西高師町）

炊事に使われた我が家の井戸水 高林寺の北側（家の前）に表浜の養蚕農家を移築した集会場（公会堂と呼んだ）があった。一階は8畳が八つ、二階は六つあり、大きな炊事場も付いていた。その公会堂は怒部隊の兵隊さんたちの食事を作る場所になっていた（炊事場は各地の学校、お寺、集会場など随所に分散していた）。食材はどう調達したか分からないが、水は井戸水が豊富に出た私の家に汲みに来ていた。

大きな水桶を二人で担いで日に何度も運んでいた。食事は時間になると町内のあちこちに分宿していた兵隊さんが受け取りに来ていたようだ。また、毎日ではなかったが、2～3人が家の風呂をつかっていった

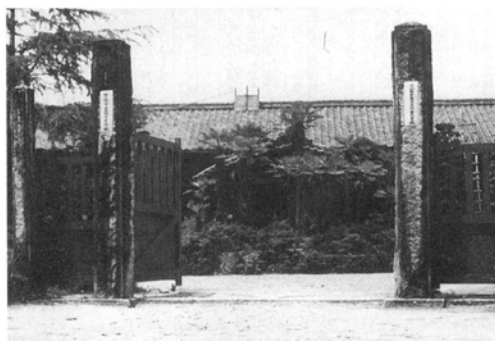
こともあった。

鎌子 郁夫 74歳（西高師町）

高師国民学校（昭和16年の「国民学校令」で豊橋市高師国民学校に校名が変更になった。）

昭和20年、私は高師国民学校初等科の5年生だった。空襲警報が毎日のように出て出るとすぐ下校した。暇だったので友達とあっちこちでよく遊んだなあ。学校では農作業もかなりあって教室の授業はほとんどできなかった。体を鍛えるために運動場では、団体行動や駆け足訓練が多かったが、みんな気合が入っていた。高等科の先輩たちは背のう、ゲートル、竹やりなどを使った軍事教練をよくやっていた。シートを使って靴を一針一針縫ったこともあった。

K・S 71歳（高師町）



敵機が反転 我が家（芦原町）の入口の所に、20mm 2連双機関砲陣地があった。ある時、大崎飛行場が米軍艦載機の攻撃を受けた。帰りの飛行は、こちらから見ると植田橋辺りから敵機が上昇してきた。それを兵隊が狙い撃った。そしたら、敵機が反転してきて、こちらに向かって機銃掃射してきた。当たらなかったけれども、ものすごく気味悪い音だった。

豊田 正人 76歳（高師町）

平和の礎

芦原校区の戦没者は、平和の礎（豊橋市遺族連合会著）によると七三名である。内訳は高師町十六名、西高師町三四名、芦原町十一名、松井町十二名である。戦没者（戦死、爆死、戦病死）は、国内では学徒動員された豊川海軍工廠、国外では東南アジアを中心に中国、シベリアと広範囲に及んでいる。

(6) 戦後のあゆみ

兵器の処分 昭和20年（1945）8月15日、終戦により武装が解除された。この近辺は古くから軍事施設があり、本土決戦に備えた前線基地になっていたため、兵員のみならず武器（戦車、トラック、大砲、小銃など）、弾薬、糧秣の軍需品が集積された。進駐軍の武装解除の命令によって兵器は高師原（現ユニチカ付近）に集められた。また、廠舎には食料、レントゲン、木材などが集められ、一般の人が近寄らないように昼夜見張りをしていた。

兵器は米軍立会いのもとに何回にも分けて焼却処分された。弾片が飛散するので付近の住人に避難通知がでたこともあった。

高師町の鈴木正美さん（80歳）は焼却の「ドーン」という音と同時に、すごい爆風で自宅の瓦が浮いてしまい、屋敷瓦を葺き替えた思い出や畑で仕事をしていて破片だけが人が出たことも話してくれた。兵隊は逐次復員していった。

高師原の開拓 終戦を機に高師原は農地として解放され、入植者たちの涙ぐましい努力によってその広大な土地が新しい時代にふさわしく生まれ変わっていった。その概要は次のようである。

広大な旧軍用地は食料増産と失業対策の二つの目的から、国の緊急開拓事業として県と協力して進められた。

昭和20年（1945）11月6日、開拓が着手された。開拓農民の募集は戦災者、海外引揚者、復員者、失業者などを対象とした。翌年には入植者を対象に開拓指導所、開拓実験農場も浜道に併設され、開拓に対する指導体制も整備されていった。

しかし、軍用地は荒地であり、農地には適していなかった。開墾は人力に頼ることが多く、その労力は大変なものであった。しかも土地はやせていたので、収穫は極端に少なかった。

住居をはじめ生活環境も予想以上に厳しく、入植後出費がかさみ、離農者がでる状況にまで発展していった。そうした状況を打開しようと、県下の開拓者の代表が集まり、愛知県開拓連盟を発足させた。開拓民の切実な願いは国をも動かし、豊橋地区では九つの開拓農協が成立し営農基盤が確立された。さらに、各開拓農協は連携を強めた。



開拓者の家

工場誘致 昭和20年代後半から30年代にかけては、戦後の混乱期が過ぎ、全国的に次のステップを目指した工業政策を推進しようとしていた。

豊橋市でも失業問題の解決、経済的な発展、町に活力を持たせるために大工場の誘致運動

を強力に展開していた。

大日本紡績が新工場建設計画を発表すると、全国28の都市が工場誘致に名乗りを挙げた。

豊橋市は広大な旧軍用地（高師原）に誘致しようと官民一体となり運動を展開した。その結果、昭和25年（1950）9月20日に豊橋市に内定したとの通知が届いた。

その後、①多量の工業用水確保の件、②立地条件整備の件、③農地の買収の件などの難問題を解決し、同年12月正式に契約書を交わした。昼夜の突貫工事が続き、翌26年12月5日、落成式が行われた。軍事演習地だった高師原に26万㎡の敷地を持つ豊橋市初の大工場、大日本紡績豊橋工場（ユニチカ）が誕生した。

《戦後の生活体験》

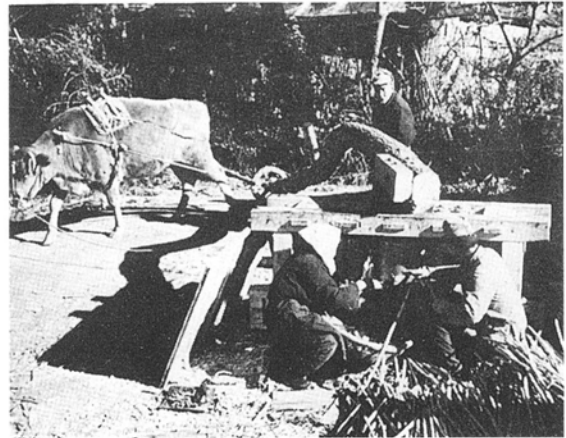
戦時下の苦しさから開放され、新時代に向けて社会は大きく変化した。

今回は松井町に住んでいる四人（伊藤みづ子さん 80歳、大竹義昭さん 66歳、加藤千鶴子さん 76歳、竹田久子さん 80歳）に、終戦から5、6年間の町内や家庭の様子について語ってもらった。

自給自足 米、麦、芋を供出した残りを主食とし、野菜や菜種など他の作物をいろいろ作るなど食料の自給自足をした。

大豆から豆腐や味噌を作り、菜種を収穫し油と交換したり、小麦を農協でうどんに替えたり、大林製菓でパンと交換した。

庭で鶏を飼って卵をとり、産まなくなると殺して食べた。おやつは芋を蒸かしたり、切干し芋にしてよく食べた。山羊を飼っていた家もあった。牛を使って共同作業でサトウキビをしぼり、煮詰めて黒砂糖を作った。当番の日は夜中まで薪を燃やし続けた。



サトウキビしぼり

盆踊り 昭和21年（1946）から学校の運動場を会場にして盆踊りが始まった。中央の踊舞台は牛車を2台並べ、上に大台を載せて広くして作った。太鼓が聞こえてくるとお隣さんと連れだって出かけ、大人も子供も遅くまで踊った。盆踊りの日が違うと高師や植田、大崎まで出かけることもあったり、他の町の若い衆が集団でやって来て、舞台に上り踊ったりした。乳母車に子供を乗せて踊りに出かけたこともあった。

潮干狩り（昭和22～26年） 町内の子供たちを楽しませようと、5～6台の牛車に40人ぐらいの親子が乗り、前芝海岸に毎年出かけた。到着すると子供たちは泳いだり、貝を掘ったり、カニをつかんだり、走りまわったり、思い思いに楽しんだ。昼になると持参したおにぎりを一緒に食べた。帰りの牛車でも歌ったり、しゃべったり、親子ともどもリラックスできた。

買い出し 食料（芋、麦、時には米）の買い出しに朝からよく来た。関西の人が多く、ほとんど物々交換だった。京都から来た人

と交換した着物類は、上等の品が多くて娘たちの嫁入り仕度になった。

買出しに来た人は、苦勞して買い出した食糧が運悪く警察の取調べに会い、取り上げられたこともあったようだ。

畑の芋や生垣の上で乾かしていた芋切干しが、盗まれることもよくあった。

夜なべ仕事 我が家では長いコードに裸電球がついていた。母親が針仕事（仕立て、繕い物）をしていると、その部屋に家族が集まり過ぎた。入口の土間で父親が藁仕事（むしろ、俵、ぞうり、すがい等）をするときは電燈を移動し、家族はそれに合わせて過ぎた。半分居眠りしながらタライで洗濯などもした。

(7) 市街化

芦原団地の誕生 豊橋鉄道が渥美線の利用客増を図るために、沿線の住宅分譲事業に乗り出した。

植田町向ヶ丘団地に続いて、昭和36年（1961）から造成が始まった。北側は雑木林、南の斜面にはツツジが咲き、道に沿って段々畑があった。池から流れる小川もあり、県道近くには小さな田もあった。

翌37年になり、第一期の分譲住宅が売り出されると希望者が殺到した。第一期入居者の鈴木義夫さんは「当時は中郷町に住んでいたが、とにかく駅に近いこと、日当たりは良く、浄化槽完備と聞いて早速応募した。競争は5倍で公開抽選になった。家内が運良く引き当ててくれた」と話してくれた。

以後も好評のうちに開発は続き、昭和39年（1964）には90戸の団地が完成した。

町内は、西高師町西浦、奥谷、沢向と芦原町字西上を合わせて新芦原町となった。

昭和37年（1962）3月には渥美線「芦原」駅が復活し、団地から大勢の人たちが利用するようになった。街づくりも街路灯の設置、消火器や用水池の完備、雨期の出水対策など町民の努力により環境も次第に整備されていった。

昭和48年（1973）には、高師西保育園（現あしはら保育園）が開園した。団地の周辺にも住宅やマンションが建ち並ぶようになった。

平成17年（2005）には世帯数250戸、人口869人の町になっている。

進む市街化 昭和40年（1965）頃から芦原校区の北側にも住宅や商店、工場、金融機関が建ち始め、昭和45年（1970）の市街化区域の指定を境にして急激に市街化されていった。その理由としては、①豊橋市の中心部が過密状態で住宅地が増やせないこと。②芦原校区、高師校区の位置が豊橋市内までわずかな時間で行け、通勤距離も適当であること。③平坦で宅地に好都合の状態だったことなどがあげられる。

市街化がすすみ、農業を取り巻く環境は大きく変化していった。郊外に新たに土地を求める人、アパートやマンションを経営する人、農業をやめて他の仕事をする人などと様々であった。

現在も工場跡地や畑に住宅やマンションの建設が見られる。まだまだ止まりそうにない。



市街化の進む校区（平成18年芦原町）

2 交通の発達

(1) 古道と常夜燈

田原海道（古道） 吉田を起点とし、田原・伊良湖に通ずる唯一の道として田原海道があった。古道は国道259号線を左右曲折するが、現在も道路として活きている所も多い。文政～天保年間にかけて、南栄空池・向草間東光寺前・松井神明社前・植田陽光寺前の古道沿いに常夜燈が建てられ現在も点灯されているところもある。

奥郡道（通称二川街道） 二川から松井町で田原街道に至る通称二川街道を縫うように古道があった。その古道沿いの村辻に1基ずつ秋葉山常夜燈があった。高林寺前のもは、道路事情により高師神社境内に移設された。芦原奥谷寺前にある常夜燈には「皇大神宮」、「秋葉山大権現」、「金毘羅大権現」、台座には「村中安全」と刻まれている。

火難・水難防除・村方安全を毎夕祈念し村人が灯明を灯したという。また、街道には、必ず旅人の目安になるような大木が植えられ、芦原大松もその一つである。



高師神社の常夜燈
(高林寺前の交差点から移設)

現在、木は枯れ、根だけが残っている。松の下は七曲り坂と呼ばれ、途中に道祖神が祀られており、そこを通る旅人は旅の安全を祈ったという。現在もその石像が草むらの中にひっそりと立っている。

(2) 街道

芦原校区には、次の主要道路が走っている。

田原街道（国道259号線） 豊橋と伊良湖を結ぶ基幹国道で、校区の幹線道路である。朝夕、高師町交差点付近はかなりの混雑である。

高師駅以西から松井町にかけて多くの自動車販売店が軒を連ね、自動車の街というほどの景観である。

野依街道（県道407号線） 南栄空池から若松町に至る野依街道は、明治42年（1909）第15師団によってできた軍用道路（特5号線）で、後に伊古部に接続され県道になった。

東三河環状線 国道1号線二川から物流の拠点三河港に至る道路である。野依街道および国道259号線と交差するため、かなりの交通量があり、安全運転の遵守が求められている。



渥美線・梅田川橋梁下を通る東三河環状線

(3) 豊橋鉄道 渥美線

渥美半島に電気鉄道を敷設して半島を開発しようという計画は、明治の終わり頃より始まっていた。当時の交通機関は、わずかに馬車の便によるものがほとんどであった。

しかし、ようやく機が熟し大正10年（1921）4月発起人（吉原祐太郎氏ほか22名）に対

して豊橋市花田～渥美郡福江間の軌道敷設許可があり、大正13年（1924）1月22日高師～豊島間（11.3km）に電車が走った。

芦原駅は、渥美線開通時に生まれた駅のひとつであった。この駅を作るのに使う土は、芦原奥谷寺の南の山を崩し、トロッコで運んだ。その頃、芦原には20戸ほどの家があり、この人夫として働いた人もいた。

最初の計画では、高師～草間～西植田と今の国道259号線に沿って敷かれる予定であった。しかし、地元有力者で衆議院議員に2回当選し、初代渥美電鉄株式会社の社長でもあった吉原祐太郎氏の尽力によって、芦原駅が生まれた。

昭和2年（1927）10月には、豊橋～黒川原間が開通した。その後芦原駅は1日利用客が2～3人しかなく、昭和19年（1944）6月5日閉鎖された。

渥美電鉄は、昭和15年（1940）に名古屋鉄道と合併した。

芦原駅の復活 渥美線は、昭和29年（1954）に名古屋鉄道から豊橋鉄道に譲渡された。

豊橋鉄道は、沿線地域の活性化に寄与するために住宅開発を進め、植田向ヶ丘団地90戸分譲に続いて、昭和36年（1961）より芦原団地を造成し住宅分譲を1年に30戸づつ3回に亘って実施した。その後、周辺にも住宅が増え、昭和37年（1962）3月15日芦原駅が復活した。

芦原駅始発電車（平成18年（2006）8月現在）

上り 5時34分 新豊橋行き

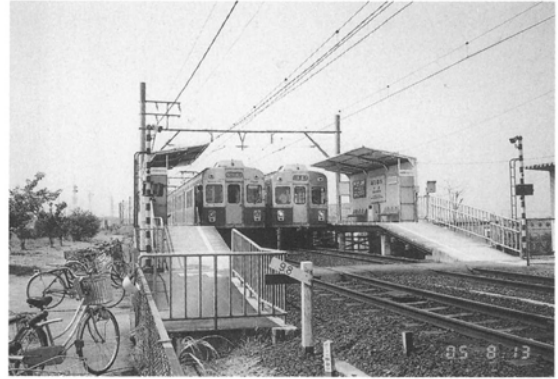
下り 6時07分 三河田原行き

芦原駅発終電車（平成18年8月現在）

上り 23時01分 新豊橋行き

下り 23時35分 三河田原行き

・本数は15分に1本間隔で運行されている。



芦原小学校近くにある芦原駅

(4) バス路線

校区内を走っているバス路線は、平成11年（1999）にはユニチカ線が利用客の減少により廃止され、新たに豊橋駅前より住宅密集地の弥生町や三本木町を経由し西高師までの路線が新設された。

伊良湖本線 豊橋駅前から国道259号線を田原・伊良湖方面に1時間に1本運行されている。バス停は高師駅前と松井町の2ヶ所である。

三本木線 豊橋駅前から北山～三本木～高師本郷～西高師経由で、1時間に2本運行されている。

表浜線 豊橋駅前から北山～三本木～高師本郷～西高師～野依～伊古部経由で、1日に3本運行されている。（平成18年（2006）9月現在）



伊良湖本線（松井町バス停付近）

3 産業のあゆみ

(1) 農業

耕地の拡大と水の確保 先人たちは農業の生産性を高めるために、耕地を広げたり、水の確保に努めてきた。耕地では藤並・芦原・松井などの新田づくりがあり、水の確保では梅田川の井堰から大井用水、芦原用水を引いた。また、雨溜池であった磯辺の杓子池を拡張し、大貯水池の昭和池を築造した。昭和43年（1968）になると農家待望の豊川用水が全線開通し、畑地灌漑にも利用されることにより、農業の近代化への道が開かれていった。一方、農業生産性の向上に忘れてはならないのが農地改革である。

昭和22年（1947）の第二次農地改革により、不在地主の全農地と農村に住む地主が持つ1町歩（1ha）を超えた分の農地を強制的に国が買い上げ、安い値段で小作人に売り渡された。こうした流れの中に高師原の開拓も進められていった。また、自作農中心の経営になったので、南部土地改良区や各地の土地改良も計画的に進めることができたのである。



昭和池の増築

多角経営から専業経営 戦前戦後を通じ、農家は自給自足を建前として経営していた。

戦後の食糧難もやわらぎ、世の中が落ち着いてくると食生活に変化が現れてきた。農家も土地に適した作物を重点的に作付けるようになった。



すいか畑

昭和30年代になるとビニール栽培（小トンネル、大トンネル、ハウス）が取り入れられ生産量は大幅に増加し市場に出荷された。昭和43年（1968）に豊川用水が通水すると畑地灌漑が可能になった。これまで露地作物の中心だった甘藷、麦類は減り、スイカ、キャベツ、ハクサイ、ダイコン等が作付けられるようになった。豊川用水の通水は作物の多種栽培を促し、農機具や化学肥料の普及、生産技術の向上と相まって生産量を飛躍的に伸ばす結果となった。

このようにして高師・天伯原台地で生産された作物はJA豊橋を通し、整備された道路とトラック便の発達により、大都市の市場に出荷されるようになった。

50年間農業をして K・H（西高師町）

《 三つの思い出 》

- 牛車にハクサイを載せて渥美線の高師駅まで運搬した(30年代後半)。冬の夜明けとともに始まる貨車への積み込みで賑わった。
- 殺虫剤の農薬（ホリドウル・パラチオン）を散布したが、毒性が強く、夏でもカッパを着て、マスクをかけ、手袋をはめてやったが数年で使用禁止となった。(30年代後半)
- 一番情熱を持って育てた作物は、スイカで35年間続いた。ビニールの三角帽子、小トンネル、大トンネル、続いてハウス栽培だった。最速は5月上旬の出荷だった。今は息子たちのイチゴ作りを手伝っている。



ハクサイの積み出し（昭和45年頃・高師駅）



田植前の苗取り（昭和48年頃）

さらに技術が進歩し、果菜や花卉^{かき}の周年栽培が可能になり、専門化が進みつつある。

一方、後継者が少なくなり、農家数は減少しているのが現状である。特に専門農家ではその傾向が大きい。

しかし、若い後継者たちは仲間と情報を交換し、関係機関と協力しながら消費者ニーズに対応しようと常に経営努力に努めている。

○ 芦原校区専門農家数

年度 町名	昭和40年	平成7年	平成17年
西高師	29	17	12
高師	2	0	0
芦原	8	5	5
松井	15	15	12
新芦原	0	0	0
合計	54	37	29

(2) 工業

江戸時代の中頃から大正の終わり頃まで、梅田川下流域の高師村大字磯辺汐浜（現・大山町塩浜）で製塩をしていた。天日で海水を濃縮し、それを煮詰めていた。生産量はあまり多くなく、主に高師村周辺の自給用であったが、一部は吉田藩に本途物（米）と共に小物（特産品）として納められた。

芦原校区は、昔は農業地帯であり、その後住宅地となったため工場は少ないが、東伸繊維、大林製菓、高師製材、イズミテック、豊鉄建設、などがある。

東伸繊維株 昭和35年（1960）、布団の“わた”作りを中心に創業した。昭和44年頃からはフェルトも作るようになった。フェルトは自動車の内装材や、エアコンの室外機に難燃繊維として、また安全靴の底や防空頭巾など広い範囲で使われており、現在は主力製品となっている。フェルトの原料は古い洋服やセーター等をリサイクルしたものと合せん繊維などである。

大林製菓株 昭和5年（1930）和菓子作りを始め、戦後はパンの製造を本格的に始めた。その頃は、世の中全体が食糧不足で大変忙しい時期であった。特に、30年代後半までは、近くの農家の人が小麦を持ってきてパンと物々交換をした。その後、販路は渥美半島一帯と東は白須賀辺りまでと広範囲に及んだ。平成18年5月に屋号を「だいふく屋一休」とし、和菓子を中心に製造販売している。

高師製材株 設立は戦後の昭和22年（1947）、最初の名称は高師土建、製材と土木建築でスタートした。戦後の復興期で、南栄の田原街道沿いの商店街を建設したり製材部門も大変

多忙を極めた。平成15年（2003）製材部門を廃止し、マンション経営と木材の販売になった。

野田爺の話

戦後の復興期には面白いように売れたのん。多い時には大工や車力など二三人の従業員がおったのん。今の天皇陛下が皇太子のとき、うちで製材した木を材料に舞阪の船大工が作った船で、天皇ご一家が浜名湖で舟遊びをされたこともあった。

㈱イズミテック ボイラーの水処理剤の製造販売会社として昭和37年（1962）に創業した。以降、社会的な公害問題を機に環境分析を開始し、昭和51年（1976）に環境計量証明事業所となった。主な事業内容は、高度な分析技術を必要とするダイオキシン類などの環境の測定分析、作業環境測定、飲料水検査、品質検査などを行っている。

特に最近では、シックハウス測定、土壌汚染調査、アスベスト検査などが増えてきた。環境計量証明事業とは、私たちの住む環境を構成する大気、土壌、水中の有害汚染物質の濃度や、騒音及び振動の大きさを正確に測定・計量し環境計量士が計量証明書を発行する業務である。

豊鉄建設㈱ 昭和53年、南松山町に豊橋鉄道の保守業務を主な事業として発足した。

平成2年には、現場事務所を芦原町に開設した。以降、本社機能も芦原に移転し、土木、建築、リフォームも含んだ総合建設業を営んでいる。品質マネジメントの国際規格であるISO9001も取得し、『環境への配慮を大切に』をテーマにオール電化や太陽光発電にも取り組んでいる。

(3) 商業

昭和10年代の商店 古老たちの話によると『昭和10年代の校区の商店は、西高師町の野依街道沿いの西側に、「河合かじ屋」「金子商店」「佐野薬房」「伊藤酒店」「村田自転車店」があり、東側に「高田雑貨店」「平川床屋」が並んでいた。高師町には人家も少なく商店はなかった。松井町を通る田原街道には高師駅近くに「篠原商店」「内藤タバコ屋」があっただけだった。』

と、当時を思い出しながら話してくれた。

戦後の商店 戦後になり高師原は開拓地となり開放された。そして豊橋の発展とともに豊橋南部地区は、住宅・工場・商店がしだいに建つようになった。昭和45年（1970）市街化地区に指定されると一段と加速した。昭和55年になると芦原校区の人口は6,350人となり、以後も増加を続けている。



駄菓子屋

商店は時代とともに増加し、交通量の多い野依街道、田原街道沿いに集中した。松井町、芦原町、高師町などでは住宅の一部を商店に当てたクリーニング店、美容・理容店、飲食店、菓子店、衣料店、電気店、八百屋などが出店して便利になった。

最近では、野依街道沿いに、色々な業種の商店が多数あるのに対し、田原街道沿いには自動車の販売店の多いことと、銀行、パチン

コンビニなど駐車場を確保した店がある。自動車の普及にともない校区内外に大型のドラッグストアやスーパーができ、品揃えが多く買い物客はそちらに流れているのが現状である。大型店も小売店も各々競争が激しく、宅配の取り扱い、各種の取次ぎ、ATM（現金自動出入機）の設置をはじめ集客のサービスや販売の工夫に努めている。

また、24時間営業のコンビニが各地に出店し始め、若い人を対象に営業しているためか、コンビニ間の競争も激しく、撤退も早い。



田原街道



野依街道



4 総代会と校区の活動

(1) 校区創立に向けて

昭和53年（1978）西高師町、高師町、新芦原町、芦原町、松井町の5町総代を中心に新校区創立に向けて、設立準備会が発足した。

この会は創立に関係する諸案件の窓口業務を3年間にわたり行った。

準備会メンバー

西高師町	植村春末	
高師町	杉浦巨夫	神藤賛男
芦原町	山下 清	芳賀不二男
新芦原町	斎藤牛之助	金沢 清
松井町	大竹正二	中村市朗

《校区誕生まで》

1 新校区の区界

1案：市側から、交通事情を考慮し、国道259号線以南、野依街道以西、梅田川に囲まれた地域（西高師町・松井町は分町）

2案：5町全域参加案

3案：できるだけ分町を避ける線で学区界の設定

以上の案件を協議した結果、通学距離、通学の安全性、神社、公民館などを考慮し、一部地域の除外を認め、3案で決着した。

2 小学校建設の位置

地元から三つの候補地を提案

1案：白山地区（土地が狭い）

2案：野依橋近くの柚木地区（距離に難）

3案：芦原町嵩山地（中心に近い低地）

協議の結果、当時の青木茂市長の意見を参考に、3案に決定した。

3 用地取得と自然災害・通学路対策

バブル全盛期のため、地権者には地元総

代が中心となり説得に奔走した。豪雨、高潮、地震対策には土地を3m^{かさあ}嵩上げる。通学路安全対策として、松井町の国道上に歩道橋の新設を県に要請する。

4 校名決定

校区民から募集し、上位三つの「瑞穂」、「芦原」、「高師西」について、市教育委員会で校名選定会議が召集され「芦原小学校」に決定した。また緑化対策としては、多数の方から樹木の寄贈があった。

(2) 総代会と各種団体

総代会 総代会は、芦原小学校通学区域内の町総代および校区内の各種団体の長をもって組織し、お互いが連絡協調して校区の発展に寄与することを目的としている。

昭和56年（1981）4月発足時初代各町総代
 西高師町 植村春末 高師町 森下節雄
 芦原町 芳賀不二男 新芦原町 平山正春
 松井町 加藤久義

歴代校区総代会長（年度）

昭和56年～平成7年 植村春末（西高師）
 平成8年～平成11年 壁谷安之（西高師）
 平成12年～平成13年 藤下篤夫（高師）
 平成14年～平成15年 大竹正一（松井）
 平成16年～平成17年 天野宏行（芦原）
 平成18年～ 棚橋 建太郎
 （新芦原）

各種団体 校区には、次のような団体が意欲的に活動している。

- ・社会教育委員会
- ・消防団
- ・子供会
- ・防犯委員会
- ・更生保護女性会
- ・老人クラブ
- ・体育委員会
- ・清掃委員会
- ・まちづくり実行委員会
- ・交通安全推進委員会
- ・民生・児童委員協議会
- ・身障者委員会

(3) 主な活動

成人式（社会教育委員会） 毎年1月に、芦原小学校において、校区内で成人となられた若い人の前途を祝福し、関係者が集まって成人式が開催される。

校区体育祭（体育委員会） 毎年9月、秋の1日、家族そろってスポーツに親しむ行事としては、小学生から大人までが参加し、100m競走、大縄跳び、綱引き、パン食い競走、親子リレーなどが行われる。この他男女ソフトボール、女子バレーボールなどの競技も開催される。



小学生100m競走

児童・園児との交流（老人クラブ） 会員相互の親睦を図るため、旅行、芸能大会などを行っている。その他、芦原小学校児童との交流（昔の遊びを楽しむ会・グラウンドゴルフ）、あしはら保育園児と一緒に遊ぶ会・もちつき大会を実施している。



児童と昔の遊びを楽しむ会

民生・児童委員協議会 地域住民からの社会福祉に関する相談や支援を行っている。主な活動は、介護等の相談と高齢者の見守り、子育て支援、認知症の予防活動などである。

校区防災訓練（校区消防団・校区防災会・市消防署） 「自分たちの町は自分たちで守る」ため、防災に関心を持ち、いざと言う時に少しでも役立てるため各種団体の参加を得て、初期消火、救急手当てなどの訓練を実施。



防災訓練開会式

校区文化祭（校区まちづくり実行委員会）平成17年度8回目を迎えた。校区の芸術・文化活動の祭典は、芸能大会、作品展（フラワーアレンジメント・手芸・絵画・生け花・陶芸・木彫り）、芦原小学校児童・あしはら保育園児の作品展とフリーマーケットなどが盛大に開催される。



作品展

その他の活動 高齢者交通安全巡回教室。ゴミゼロ運動。小中健全育成会。本郷地区市民館まつりなどがある。

5 これからの芦原校区

— 願いと希望・そして夢 —

芦原5町の総代さんと小学校長が各町・学校の様子と本年度(平成17年)の取組み、これからの芦原校区づくりについて話し合った。



1 各町内・学校の現状と取組み

- ・役員組織の改善、きれいな町づくり（ゴミ対策）、情報の共有
- ・新規事業（ミニガーデンづくり、七五三祭り）、外部からのゴミ持ち込み対策
- ・納涼祭り（盆踊り）の復活、交通事故防止と不審者対策
- ・公民館の設置、地震対策（保育園移転）
- ・児童、生徒の健全育成、あいさつ運動
- ・学校と地域との連携、PTA活動の充実、話し合いを踏まえて校区としての取組みを確認した。

2 「これからの芦原校区」に向けて

- ・元気な校区にしよう（行事の活性化）
- ・安心、安全な校区にしよう
- ・清潔な校区にしよう
- ・災害（防火・防災）に強い校区にしよう
- ・学校との交流を一層深めよう

3 校区としての当面の対策

- ・総代会と行事担当者が事前、事後の打ち合わせを十分行う
- ・行事の反省点、要望等を記録し次年度に申し送る
- ・校区民が気軽に交流できる「参加型」のイベントを企画する

芦原っ子の夢 未来の芦原小学校

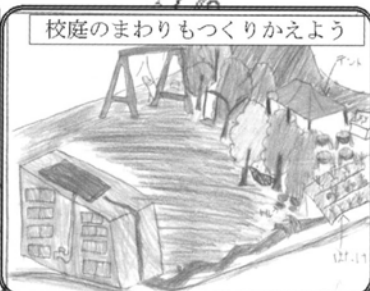


小美術館の屋根は太陽の光をもらってきれいな赤や緑などになる。温水プールで5階建て!! 水族館には魚がいっぱい (3-2 木下万菜)



真ん中に池があってその池に橋がかかっていて、まわりにベンチや木や遊具がいろいろある。(4-2 国弘幸樹)

畑でだいこん、にんじん、トマトを育て、いっぱい外で食べられる。テントもあって森のキャンプみたい。屋上プールから畑に水を流す。地震があっても外で生活できる。(1-1 鈴木十和)

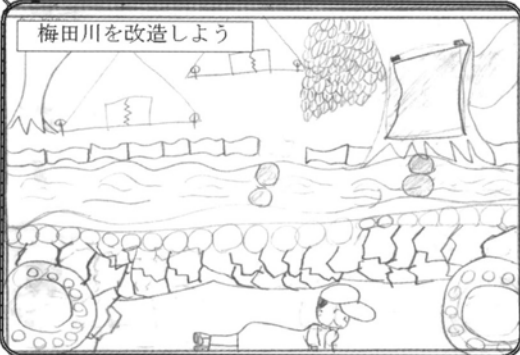


大きな森があってたくさんの虫がいて虫とりをしたり探検をしたりして遊べる場所。虫の観察もできる場所。ツリーハウスもつくる。



みんなが動物たちとふれあえる場所があったらうれしいです。(3-3 二見 奈苗)

学校や学校のまわりが、「こんなふうになったらいいなあ」という未来の夢を、芦原小学校の全校児童に募集したところ、たくさんの子が素敵な夢を描いてくれました。「こんな校舎になればうれしいな!」「こんな場所が学校にあったら楽しいな!」というものをスケッチした中から、数点選んでここに発表しました。



キャンプ場に大きな木を植えて木の中央下に穴を開け、秘密基地にする。川の下に洞窟をつくる。(3-2 藤本汐理)

第3章 教育と文化

1 学校教育と保育

(1) 歩みだした「近代学校」

明治5年(1872)学制発布により高師校区には、「第10中学区第10番小学脩徳学校」が、明治6年7月20日高林寺に設立された。

その年の12月には「小学高足学校」、明治9年には「渥美郡第24番小学高師学校」と改名された。児童数の増加で校舎が手狭になり津森の丘にあった村役場を廃止して校舎に使用した。

明治34年(1901)10月31日に上原の現在地に移転した。この間、優れた教師達によって優秀な子弟が多く育った。特に高等科には、



元脩徳学校があった高林寺



津森学校跡(現在西高師町)

植田・野依から通学者がいることから、渥美郡の中心校としての存在であった。

(2) 芦原小学校ができるまで

戦後になって高師原(西幸・測点)・天伯原に入植した人たちの子弟が、高師小学校に通学するようになり、その数は三分の一以上を占めだした。

また、高師原の真中にユニチカが誘致された昭和26年(1951)頃から、野依街道沿いに家が建ち始め、年々増え続けた。特に、昭和45年に市街化区域に指定されてからは、高師・西高師・芦原・松井地区まで宅地化が急速に進んだ。

その結果、昭和45年の高師小学校の児童数約900名が、昭和51年には1,850名となり市内一位のマンモス校となった。翌年、幸小学校の開校にともない、1,613名と僅かばかり減少したが、昭和55年には1,914名に増えたためにプレハブ校舎で勉強する子供達もいた。

他方、磯辺小学校も高師小学校と同様に昭和48年530名が、昭和54年には1,000名を越す児童数であった。



学校が建てられる前(水田であった)

そこで、両校区の関係者はそれぞれが子供達の幸せを願って、数多くの会合を持つとともに、市役所へお願いに出向いた。

(3) 芦原小学校

小学校の誕生 昭和54年(1979)9月8日から、用地の造成が始り、翌年6月27日に起工式が行われ、昭和56年3月に完成した。当時としては珍しいベランダ付きの校舎であった。



完成した校舎

校名の由来

校区の人々から校名案を募集したところ85の名前があった。「芦原」と名付けられたのは、高師原の南一帯はかつて水田と畑で周りには葦もたくさん生えており「芦の原」と呼ばれていたこともあり、葦のようにすくすくと元気に育ち、雨にも風にも負けない明るくたくましい活力ある子供になることを願い決定した。

開校の日 「本日ここに、豊橋市立芦原小学校の開校を宣言する。」昭和56年(1981)4月2日午前10時、青木茂市長の力強い開校宣言が行われ、豊橋市で46番目の小学校として、発足した。



芦原小学校の校章

校章の形は、左右の葦の葉と中央の円で小学校の「小」の字を表し、葦の葉の頂点を結んだ全体の形は豊橋の「ちぎり」のマークを表している



開校式(昭和56年(1981)4月2日)

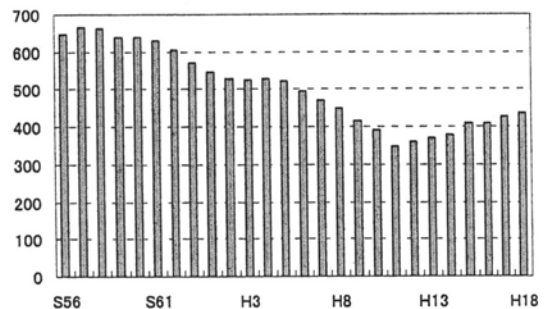
初代	後藤 正	(S56.4~ S60.3)
第2代	山下 喜一	(S60.4~ H1.3)
第3代	杉浦 武子	(H1.4~ H4.3)
第4代	森田 照彦	(H4.4~ H6.3)
第5代	山本 定美	(H6.4~ H9.3)
第6代	賛 溥	(H9.4~ H11.3)
第7代	彦坂 信行	(H11.4~ H15.3)
第8代	鈴木 清次	(H15.4~ H18.3)
第9代	岡田 久嗣	(H18.4~)

芦原小学校の歴代校長

児童数の変化 開校時の児童数は、男子344名 女子304名、計648名であった。学級数は全学年ともに3学級合計18学級であった。

児童数は下図のように昭和57年度(1982)に665名でピークを迎えたが、その後減少しつづけ、平成11年度(1999)には、350名となった。それ以後は増加傾向にあり、平成18年度(2006)の児童数は438名、学級数は16学級である。

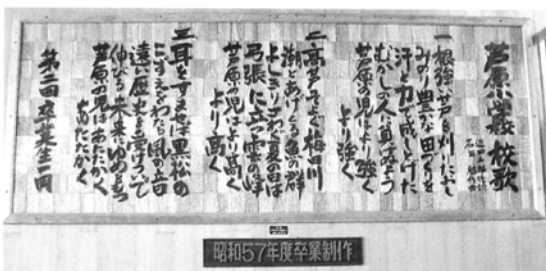
開校から平成17年度までの卒業生総数は、2,223名を数えている。



芦原小学校児童数の変化

25年間のあゆみ 芦原小学校の教育目標を、「忍耐と活力 つよく たかく あたたかく」とした。

昭和56年度の第1回運動会を記念して、「芦の子マーチ」がつくられ、開校2年目に、待望の校歌ができあがり、12月5日校歌制定発表会が盛大に開かれた。歌詞には、子どもたちのふるさと芦原で育つ熱い願いが込められている。



体育館に掲げられた校歌の扇額

昭和58～59年、豊橋市教育委員会より「学校経営」の研究委嘱を受け、「芦原の地に根ざした学校経営」をテーマに研究を実践した。また、地域の様子を克明に記した、ふるさとミニ百科「あしはら」を発行した。

平成2年（1990）11月3日には、開校10周年記念式典行事が開催され、10周年記念誌「芦原小この10年」を刊行した。また、平成7年（1995）には、開校15周年記念として、校舎壁面に「校章」と「元気いっぱい、工夫いっぱい、笑顔いっぱい」のスローガンを掲示した。平成12年（2000）には、開校20周年記念式典を行い、「校区たんけんマップ」を全世帯に配布した。

平成13～15年度には、豊橋市社会福祉協議会から「福祉協力校」、さらに平成16,17年度は「福祉研究校」になり、「昔の遊びを楽しむ会」、「福祉実践教室」、「ボランティア活動福祉実践活動」などの研究実践を行った。

平成15年（2003）、豊橋市教育委員会より「健康教育」の研究委嘱を受け、平成17年（2005）



芦の子ランドで遊ぶ子どもたち

11月2日、「心身ともに健やかで、楽しく活発に活動する芦原っ子の育成」を研究主題に、子どもの運動習慣（体づくり）と良い生活習慣（生活づくり）の形成をねらい、子どもたちの健やかな生活の創造をめざして、研究発表を行った。

平成16年度には、これらの地道な研究成果が認められ、県教委・県学校保健会より愛知県健康推進学校の「特選校」、17年度には「優秀校」を受賞した。また、平成18年7月27日には、全国小学校体育科教育研究集会豊橋大会の会場校となり、本校の健康教育の実践は全国が注目するところとなっている。



芦原体操 カエルの逆立ち

運動面においては、平成元年に市内バスケットボール大会女子優勝、市内水泳大会で女子は、同年から4年連続優勝を果たした。さらに平成8年の市内サッカー大会で男子が優勝するなど輝かしい成績を残している。

(4) 本郷中学校

本郷中学校は、昭和61年（1986）4月1日に高師台中学校から分離し、開校した。開校時の生徒数は、男子539名、女子526名の合計1,065名、学級数は1年生が9クラス、2・3年生が8クラス合計25クラスであった。



2羽の
「しらさぎ」
を描いた
校章

校章は、本郷地区に数多く見られる「しらさぎ」をモチーフに、夢を持って大空に羽ばたいてほしいとの願いから2羽組み合わせて描かれている。開校当初から、地域と一帯となった学校づくりをすすめ、学習活動や部活動で多くの実績を残してきた。



本郷中学校

開校20周年を迎えた平成17年（2005）度は、男子254名、女子250名の合計504名、学級数は1年生4クラス、2・3年生が5クラスの合計14クラスの規模である。平成17年11月6日には、アイプラザ豊橋（勤労福祉会館）で、20周年記念式典を開催し、さらなるステップアップを目指した学校経営を推進している。

(5) あしはら保育園

西高師町に昭和48年（1973）「高師西保育園」が誕生した。用地は、上下二つあった池の内、下の池を埋め立て、池の周りの松の大木も切り倒し広い土地を確保した。

園舎は、南側に通路があり採光のよい2階建てである。

昭和59年（1984）新たに遊戯室を建設し、園の名前も「あしはら保育園」と改名した。2階建ての遊戯室で、1階部分は雨天時にも遊具や砂場で遊べる構造である。



あしはら保育園

園長（石田重子）の話

当園は住宅地の中にありますが、周辺にある緑地公園や梅田川、神社、広場などを利用して積極的に園外保育を行い、自然とのふれあいを楽しんでいます。また、園庭にある土山を活用してのだんご作りや泥んこ遊びなど五感を刺激するような体験や開放感いっぱいの遊びを大切にしています。

室内ではリズム遊びやふれあい遊び、絵本の読み聞かせを継続的に行い、楽しさを共感していく中で、子供たちのたくましさややさしさを引き出す保育に取り組んでいます。

あしはら保育園の保育目標であります「心身ともにたくましくよく遊ぶこども」像を目指し、これからも大切な子供さんをお預かりしていきたいと思っております。

2 戦後の社会教育

戦禍で衣食住を失った国民が、苦しい生活の中から立ち直った。その原動力は、戦後の新しい教育を享受できたことである。学校内外の場で、民主主義の精神を学ぶ教養講座への参加や、第一次産業に携わる人々へ食糧増産に関する産業教育の現地研修が行われた。

昭和24年（1949）に社会教育法が施行された。この年、豊橋市教育審議会が設置され、青少年及び成人の人間形成教育が行われた。

豊橋市の社会教育の歩みは、次のようであった。

(1) コミュニティ活動

日本経済が高度成長期の昭和40年（1965）後半には、地域住民のコミュニティ活動の場として、市民文化会館や生活家庭館が開設された。また、各小中学校区には校区市民館や地区市民館が設置された。これらの施設は、昭和60年（1985）代後半、生涯学習センターとしての機能を果たし、今日に至っている。

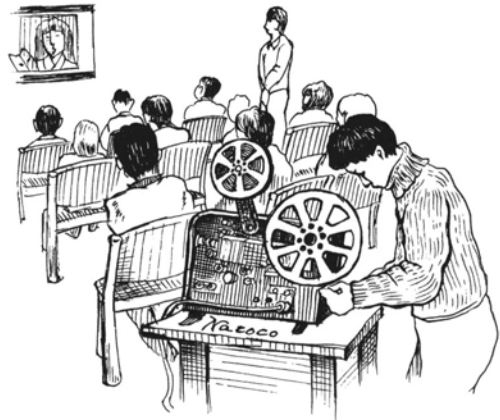


生活家庭館

(2) 校区社会教育委員会

地域住民の自主・自治組織である各校区社会教育委員会は、昭和24年（1949）に市社会教育委員会連絡協議会（当初22校区）を結成

した。主な活動は校区ごとの成人式と社会学級の企画・運営に当たった。昭和27年（1952）から36年（1961）頃までは、小学校や公民館を会場にナトコ映写機による巡回映画が盛んに行われた。娯楽の少なかった当時の人々は巡回映画を心待ちにしていた。



ナトコ映写会

わが芦原校区社会教育委員会は、小学校開校時の昭和56年（1981）に高師校区社会教育委員会から分離独立した。初代会長伊藤昭三氏を中心に五町内からの委員で組織し、新成人の門出を祝う式典の他、明るい社会づくりの講演会の企画・運営を行った。

校区文化祭は、平成8年（1996）度から校区まちづくり委員会へバトンタッチされたが地域文化活動の推進役には、社会教育委員会の活動が重要であるとの再認識により、平成16年（2004）度から社会教育委員会も加わり今日に至っている。



平成18年1月9日芦原校区成人式

(3) 芦原校区市民館の活動

今日の変化の激しい社会を生きていくためには、生涯にわたって学習し、新たな社会や価値ある文化を創り出す能力を自らの力で身に付けていく必要がある。

昭和40年代後半から50年代に、行政は市社会教育審議会の答申に基づき、中学校区に地区市民館、小学校区に校区市民館を逐次開設した。

わが芦原校区市民館は、昭和56年（1981）4月に小学校の敷地内に開設された。開館の目的は地域住民の教養の向上、健康の増進、生活文化の振興などである。特に、市民館の役割は地域住民の「集い、学び、結び」活動を支援する施設である。



芦原校区市民館

芦原小学校の開校と同時に発足した芦原校区にとっての校区市民館は、五町（高師・西高師・芦原・松井・新芦原）の住民相互のコミュニティ活動の重要な拠点の役割を担っている。多様化する住民の学習ニーズに応じた企画・立案、運営は、校区市民館の運営委員会に課せられている。

校区市民館の企画・運営面を委ねられた運営委員会の組織は、総代会、各種団体長、館長（非常勤）、主事の構成メンバーである。

館独自の事業計画は、時代の要請と地域住民ニーズを考慮し、人と人とのつながりを重視した心の豊かさや地域への愛着を醸し出す

講座の企画・運営に苦心している。特に平成12年（2000）から学校完全週五日制の実施により、土曜休業日の子供たち向けの生涯学習では、生活体験を重視した「生きる力」の育成と学校・家庭・地域とのより良い連携の在り方が求められている。当校区市民館の特色ある講座には「親子陶芸教室」「ドッジビー」「親子料理教室」などがあげられる。



親子陶芸教室

(4) 本郷地区市民館の活動

当地区市民館は、本市21番目の（平成元年（1988））の開館で芦原・高師校区民が待ち望んだ施設である。当館利用者が、生涯学習を通して自己実現を図り、生きがいを持ち続けるための支援活動については、市行政側と当館運営委員会の企画・運営が鍵を握っている。両校区民のコミュニティづくりの担い手は、地域内の諸団体と当館で学ぶグループやサークルのメンバーである。そして、一般住民誰もが気軽に参加でき、人と人との心のふれあいの場として、毎年地区市民館まつりが実施されている。

住民の学習ニーズを充足する講座の企画・運営は、市社教及び当館が責務を負っている。

平成17年（2005）度の特色ある講座「パソコン講座」「幼児ふれあい教室」「ベスト健康法」などは、広報誌「市民館だより」「グラッド」「市民館ホームページ」で市民に知らせている。



本郷地区市民館祭り

21世紀に課せられた地区・校区市民館活動は、地域住民の日常生活圏内における地域課題の掘り下げと、すべての世代に開かれた総合的な社会教育施設であるとの認識をどう育成するかである。また、国際化に向けて国際交流事業の企画とともに、自らが住む町や市の地域文化・伝統芸能などの再発見と継承する学習の場の創造が求められている。

(5) 高師緑地公園の施設

高師緑地公園には、生活家庭館や青少年運動広場、高師老人福祉センターなどが設置されている。

生活家庭館は、昭和42年（1967）に市民の生活改善や婦人（女性）・青少年の研修の場として開館した。生活改善の一環としての当館での挙式は、予約しないと使用できないほどの盛況さであった。



生活家庭館の結婚式（昭和43年）

高齢化社会の到来を予期し、昭和48年（1973）に市民60歳以上の高齢者が利用できる「高師老人福祉センター」が開館した。ここでは、高齢者自らが健康管理と機能回復器具の活用、仲間との楽しい会話・カラオケ・ダンス、将棋・囲碁、俳句などで長寿の源である脳の活性化を図っている。

市民の憩いの場としては、親子で子供広場の遊具の活用と、水の恋しい季節には「せせらぎ川」での水遊びの姿が見られる。また、ジョギングコースの利用者は年々増え続けている。



芝生の上でグラウンドゴルフを楽しむ 芝生広場



せせらぎの川

その他、東海沖地震や東南海地震の災害時には、市民の避難場所として防災用備蓄倉庫や防火水槽が設置されている。

3 ふるさと再発見

(1) 神社

高師神社

祭神 伊弉諾命 伊弉册命
いざなぎのみこと いざなみのみこと
 菊理姫命 進雄命
くくりひめのみこと すきのうのみこと

境内社 稻荷大明神・秋葉大明神・
いなりだいみょうじん あきばだいみょうじん
 御霊神社
みたまじんじゃ

鎮座地 西高師町字船渡3番地

例祭日 3月第1日曜日、10月第2土・日曜日



高師神社

由緒 明徳3年(1392)6月字船渡に、菊理姫命、伊弉諾命、伊弉册命の三神を合祀する白山社を建立した。享保7年(1722)6月、同町津森に「進雄命」を祀る進雄社を創建(末社に琴平社)した。この両社が昭和18年(1934)4月に神社合祀の許可を得て合併、高師神社と改称する。同社境内社の御霊神社には、西高師より出征して国の為に殉じた戦没者が祀られている。

逆鋒社

祭神 国常立命
くにのとたちのみこと

境内社 秋葉社 祭神 迦具土神
かぐつちのかみ
 水神社 祭神 罔象女神
みずのはめのかみ
 津島社 祭神 素盞鳴神
すきのうのかみ

鎮座地 芦原町字芦原137番地

例祭日 10月第2土・日曜日



逆鋒社

由緒 明暦3年(1657)9月に創建。吉原弥次右衛門(初代)が、芦原新田を開拓するにあたり、浜道町字芝切43番地の逆戈神社より分霊を受けて産土神としたことに始まる。
うぶすながみ

高師町神社

祭神 天照皇大神
あまてらすおおみかみ

境内社 秋葉神社

鎮座地 松井町字中新切66番地

例祭日 10月第2土・日曜日



仮安置されている高師町神社

由緒 昭和24年(1949)伊勢神宮に詣でて御神符を受け創建。高師町の発展を祈り、同町官有地の一角に小祠が祀られる。平成8年(1996)12月からは、高師町内へ移転し、改築のため、現在地(松井町字中新切66番地)に仮安置されている。

神明社

祭神 あまてらすおみかみ 天照大神

鎮座地 松井町字松井129番地

例祭日 10月第2土・日曜日



神明社（本殿正面）

由緒 社伝によれば享禄3年(1530)9月16日、伊勢湾の御神が神宮の分霊を捧持して航行中、暴風を避けるため三河湾の西松井に上陸して仮安置したことが創祀と伝わる。明治5年(1872)5月に村社に列し、明治9年11月28日公許の上、現在地に移転し、鎮座している。

(2) 寺院

高林寺

所在地 西高師町字船渡53番地

創建 天正元年(1573)

開山 生誉是念

開基 当所山本氏の遠祖で法名柄誉蓮心信士

縁起 古記に「天正元年高足村高林寺開基生誉是念、命日2月13日、号谷響山」とあり、この古記は元文元年(1736)の著述であるから、現在の山号小谷山はこれ以後の改号であるが、その年時は不明である。

改築前の本堂は寛保元年(1741)に山本家先祖の長左衛門の寄進新築で屋根は茅葺であったが、昭和25年(1950)に亜鉛メッキ銅板葺に葺き替えられた。現在の本堂は昭和52年(1977)に改築されている。



高林寺



おぼんぞう
涅槃像図

お釈迦様が亡くなられたとき、頭を北側に顔を西向きして、右脇腹を地に付けた状態であったと伝えられている。また、この周りに菩薩・弟子・羅漢・八部衆・国王・民衆と、鳥獣虫魚が集まって、お釈迦様の死を嘆き悲しんでいる。

奥谷寺

所在地 芦原町字芦原128番地

創立 元禄8年(1695)

開山 一代端堂玄呈和尚(円通寺住職)

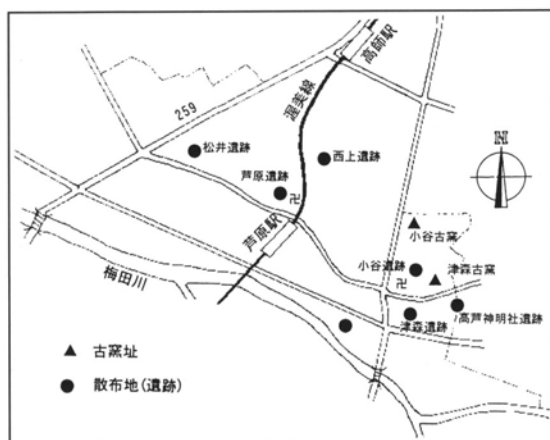
開基 蘆原新田開拓者「吉原家三代弥次右衛門」



奥谷寺（入り口）

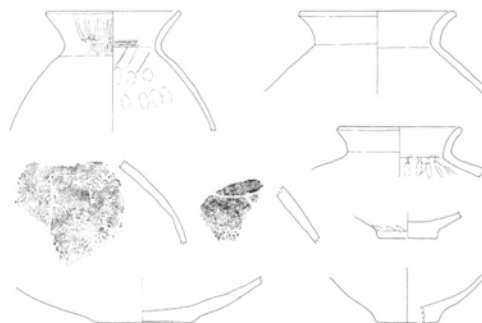
縁起 山号月桂山は吉原家初代の法名月桂心居士により山号を称し、寺号奥谷^{おくこく}は、吉原家屋敷の北裏の窪地を人呼んで奥谷といい、当時はこの地に建てられたからである。開基吉原氏は、遠州の人で明暦2年（1656）この地に移って梅田川下流の沼地の開拓を計画し、三代に渡って事業を行い、芦原新田を開いた。大正5年（1916）に法地に転格、吉原家から多くの寄付を受けてきた特異の寺であり、昭和27年（1952）今までの寺号奥谷庵を奥谷寺に改めた。当時の本尊は正観音坐像である。本堂は入母屋造で、昭和7年（1932）に茅葺きから銅板に葺き替えた。

(3) 遺跡

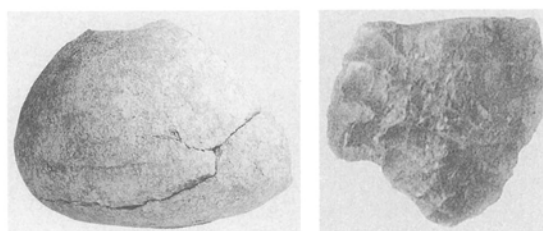


遺跡・古窯址位置

西上遺跡 芦原町字西上公園の辺りから東側の台地緑端に広がる西上遺跡。昭和56年（1981）、宅地造成中に弥生式土器数十点が発見されたことをきっかけに調査が始まった。竪穴式住居址を5ヶ所、土豪または溝状遺溝が3ヶ所見つかったほか、須恵器甕のすゑき小片など遺物も多数出土。なかでも壺形や高杯形など弥生式土器の破片は約260点がみつき、後期中葉の寄道式新を中心に、後期後葉の欠山式も混在。その他、弥生時代中期から後期に多く見られる青灰色チャート製の石鏃せきぞくの基部片なども発見されている。

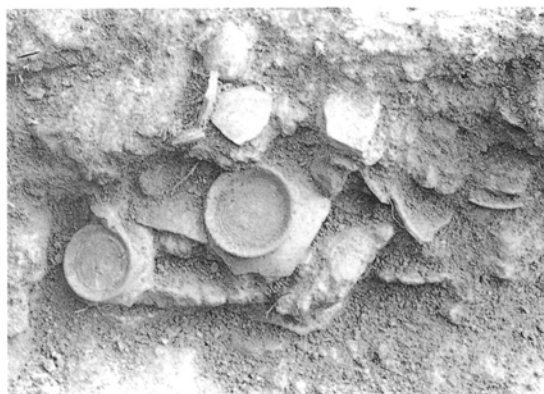


西上遺跡から出土した壺形土器



西上遺跡から出土した壺形土器と石鏃

小谷古窯 ^{こたにこやう}昭和51年（1976）8月、梅田川流域の遺跡分布を調査中、西高師町字小谷の削平地の土中から固く焼けた窯壁や遺物を発見。これをきっかけに小谷古窯の調査が始まった。主に平安時代とされる古窯址で、遺溝は窯体と灰原。特に窯には、炎を万遍なく送り込む方法として、燃烧室の約3分の2を平坦部に造り、焼成室が煙道に移行する部分の床を急傾斜に造るなど、小規模ながらも燃烧機能の向上に工夫が凝らされている。また、遺物も多数出土。大半は平安朝瓷器の深碗で、その他、小型の窯道具が若干含まれていた。



積み重なって出土した陶片

(4) 芦原の先覚者

吉原弥次右衛門

「芦原縁起」によると、明暦2年(1656)遠江国敷知郡利木村(湖西市知波田)の人である。(初代)吉原弥次右衛門は、尾崎盛吉・豊田重正などと相談し、芦原新田開発を始める事が記されている。

芦原はもともと梅田川の河口にあつて沼の様な荒地であり、寛永9年(1632)、時の吉田城主水野忠清がこの地を開拓しようとしたが、度々の津波や洪水で失敗、その後、永らく放置されたままであった。

(初代)吉原弥次右衛門は、吉田藩主小笠原忠知の許を受け芦原新田開発に着手した。しかし、この地を入会地とした村々の猛反対に遭ったり、津波や洪水等により工事が順調に進まず、(二代)弥次右衛門、(三代)弥次右衛門が苦勞の末、川を移設し堤防を作り、元禄3年(1690)、35年間かけて遂に大成した。これを芦原新田と名付けた。



吉原家先祖の墓

吉原祐太郎(1860~1936)

吉原弥次右衛門の末裔まつえいに当たる吉原祐太郎は、渥美郡高師村大字高師字芦原(芦原町字芦原13番地)に万延元年(1860)に誕生した。



故 吉原祐太郎

出生当時の吉原家は、既に高師村に於ける大地主として、富裕を以て知られていた。明治12年(1879)、郡内有志らとともに農業団体を興した。

明治19年(1886)、愛知県議会議員となり、同23年(1890)、渥美郡議会議員をも兼ねた。この間、明治29年(1896)、三河製糸株式会社

取締役に就任。

明治45年(1912)、大正9年(1920)の衆議院議員選挙に2回当選した。また、大正13年(1924)には、渥美電鉄の創設に参画して初代社長となった。

東三河財界の長老で、愛知政界の重鎮であり、特に、土木・水利事業、農蚕業、初等教育に貢献し、その功績は大きい。

昭和2年(1927)、天皇陛下の行幸みざりの砌に、産業功勞者として単独拝謁の光榮に浴したことは、その功績の大きかったことを物語っている。

昭和11年(1936)3月2日、没した。

青木 茂(1910~2003)

明治43年(1910)5月3日、台湾で生まれた。台北高等学校、台北帝国大学を卒業し、その後、台北州産業部長、昭和22年(1947)から、参議院



故 青木 茂

事務局警務部長などを歴任した。

昭和35年(1960)に豊橋市西高師町字奥谷1番地19に住居を構えた。同年当時の豊橋市長河合陸郎氏のもとで助役に就任4期14年余の在職中、助役時代の手腕を高く評価され、昭和50年(1975)から同58年まで、2期8年間豊橋市長を務めた。その間、厚生省医療審議会委員、財団法人行政管理研究センター理事、国立豊橋技術科学大学参与、愛知県市長会会長などの要職を歴任した。

特に東三河を新しい工業地帯とするため、三河港造成など基礎整備を推進した。また、資源循環型社会の先駆けとなる都市農村環境事業の導入、東三河の中心都市として産業の振興、都市基盤整備、資源化センター、地区・校区市民館の設置、社会福祉事業の拡充、地方自治の育成に大きな功績を残した。

(5) 芦原に伝わる民話・むかし話

大玄法師ときつね むかし、だいげんほうし、大玄法師というおぼうさんが高林庵（今の高林寺）に住んでいました。ある時、南の浜に行く途中、野依をすぎて天伯原に出ると、きつねがたくさん遊んでいました。

そこでおぼうさんが、いたずらにほら貝を取り出し



てとつぜん吹き鳴らすと、きつねはびっくりして、逃げて行ってしまいました。

帰りにおぼうさんがこの天伯原まで来ると、急に日が落ちてまっくらになり一步も進むことができなくなりました。ぼうさんは困ってしまい、あたりを見回しました。すると向こうにひとつ明かりが見えたのでそこへ行って「とめてくれ」と言いました。すると一人のばあさんが出てきて、「夕方家に死人があったので、となりにそれを知らせに行ってくる間、るす番をしてください」と言って出て行きました。

おぼうさんが中に入っていくと家のかたすみから、死んだ人が起き出して来てそばに近づいてきました。気味が悪いので少しづつ後ずさりしていたら谷川に落ちてしまいました。するとぱっと真昼間にもどって、寺へかえることができたそうです。



大玄は、また大酒のみでした。もうすぐ死ぬという時「わたしが死んだ後、酒をくれたならば、悪い病気をのがれることができるぞ」と言いました。そこで、村人がおほかの前に酒をそなえて、おいのりをすると、きっとそのききめがあったと言われていました。

大玄をほうむったところを、大玄坂といいます。年代はわかりませんが、高林寺に「大玄坊のほら貝」と言い伝えて、大切にしているほら貝があるといわれていましたが、今はありません。

高林寺にある大玄坊の位はいには「天明8年（1788）3月28日死去」とかかれています。

キツネの話 おじいさんが畑から帰る途中、向こうの方にあかりが見えました。近くへよって見るときれいな女の人が出て「おいしいまんじゅうをあげるよ」と言いました。おじいさんがついていくと、野原に一軒の家がありました。おじいさんはその家の中でまんじゅうを「おいしい、おいしい」と食べていると、その女の人がいなくなりました。家のまわりをさがしても見あたりません。しかたなくまたまんじゅうを食べようとすると、さっきまでとてもおいしかったまんじゅうにへんなにおいと味がしました。そこでよく見るとそれは、こえだめのふんのまんじゅうでした。

おじいさんがおどろいて外へ出てみると、そこにはしっぽにちょうちんをぶら下げたきつねがいました。おじいさんが「きつねだ！」とさげふと、きつねは笑いながら逃げて行ってしまいました。

このことを聞いた村の人は、気味悪がってそれからは夜おそく外を歩かなくなったそうです。

参考文献

豊橋市史 第1巻、第2巻
豊橋の史跡と文化財
とよはしの歴史
豊橋市政八十年史
郷土誌 天伯
郷土誌 嵩山
高師風土記
芦原小この10年
ふるさとミニ百科 あしはら
豊橋市南部農協二十年史
豊橋市戦災復興誌
竜巻の記録（豊橋市）
歴史の道 一東海道一
豊橋市神社誌
豊橋市埋蔵文化財報告書第60・69集

協力者（敬称略）

監修 大須賀 哲夫

挿絵 吉原真寿美

朝倉 康彦	伊藤みつ子	伊藤 恵
岩瀬 仁志	宇佐美宗渭	尾崎 眞治
加藤千鶴子	片山 惺	鎌子 郁夫
鎌子 次義	金子 功	木原 正之
後藤 成美	小林 春吉	白井 良和
鈴木 格雄	鈴木 健一	鈴木 正美
鈴木 宏尚	鈴木 義夫	篠原 ひで
住吉 政浩	竹田 久子	高橋 千里
戸沢 房江	豊田 正人	豊田 保
豊田 秀人	林 清	林 昭一
林 昌彦	藤下 篤夫	牧野彊太郎
森下 節雄	吉原 克己	芳賀 陽
山下 こと	山本 芳子	山本きくゑ
山本 勝枝	石田 重子	上田 敏博
岡田 久嗣	金子 徹	近藤 秀樹
小山 勝信	柴田 祥宏	鈴木 清次
内藤 豊典	樋口 信彦	山本 芳則
山下 裕通		

芦原小学校児童・本郷中学校生徒代表

編集後記

芦原校区史編集委員会は、平成16年11月に委員10名とサポーター3名との初顔合わせ以後、月1回ずつ会合を持ちました。各委員とも校区在住とはいえ、初対面の者同士でしかも校区史の編集は未経験のために、プロット作成までに多くの時間を要しました。

執筆作業が軌道に乗った原動力は、監修をお引き受け下さった大須賀哲夫氏の適切なお指導・ご助言に因るところが大でした。

私たち編集委員は、協力者の熱き思いをできるだけ多く掲載するように心掛けましたが、限られた紙面のために貴重な資料を取り上げることができず、申し訳なく思っています。

そこで、21世紀の担い手の皆さんへの編集委員からの伝言は、私たちの身边には埋もれた資料が数多くありますので、是非とも郷土に関わる自然・歴史・文化に光を当てて、新しいまちづくり・人づくりに役立てていただきたいと切に願っています。

最後に、芦原校区史の編集にご協力くださいました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成18年12月

芦原校区史編集委員一同

編集委員長 高橋 健

編集委員

天野 宏行	芳賀不二男	佐野 勝昭
宮城 浩巳	金子 秀夫	植田 哲夫
大竹 義昭	棚橋建太郎	大林 正己
斎藤富士雄	鈴木 孝之	大渡 伸一

校区のあゆみ 芦原

平成18年12月25日発行

編集 芦原校区総代会
芦原校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社

R100
環境にやさしい
再生紙100%の再生紙を
採用しています。

PRINTED WITH
SOYINK



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyokashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋